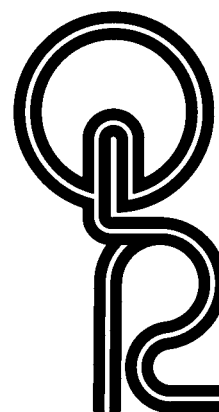


# QR Newsletter

## 第四紀通信

Vol. 21 No.4, 2014



茨城県南部・小野川河床の露頭。下総層群上岩橋層の貝化石密集層を木下層の泥層が覆う。泥層からは産出が稀なヒトデ化石も報告されている。(撮影：久保田好美、キャプション：中島 礼)

Vol. 21 No. 4

August 1, 2014

総会のお知らせ.....	2	講習会報告.....	20
2014年大会案内.....	2	評議員会議事録.....	20
学会賞等受賞者決定.....	11	幹事会議事録.....	21
学会賞・学術賞受賞者講演会報告... ..	12	メーリングリスト登録のお願い.....	23
INQUA2015組織委員会活動報告... ..	12	会員消息.....	23
INQUAと日本(3).....	13	デジタルブック販売(交換).....	24
INOUA回想録.....	15	INQUAランチセミナー.....	24
追悼.....	19		

◆日本第四紀学会総会のお知らせとお願い

9月7日(日)に東京大学柏キャンパスにて2014年度総会が開催されます。会員各位のご出席をお願いいたします。やむを得ず欠席される場合には、委任状(とじ込みはがきまたはファックス、メール)を必ずご提出ください。9月1日(月)必着でお願いします。

- とじ込みはがきでの委任状提出の場合は、お多数ですが切手を貼り、締切日までに到着するように早めに投函下さい。
- ファックスでの委任状提出の場合は、とじ込みはがきか下記の様式に必要事項を記入し、下記のFAX番号宛にお願いします。

FAX番号：03-5291-2176 日本第四紀学会事務局宛

- メールでの委任状提出の場合は、宛名を「2014年度総会議長」としたうえで、代理人氏名(「議長」でも可)、氏名、所属を明記し、daiyonki(at)shunkosha.com(学会事務局：「(at)」の部分で「@」に変えて下さい)へ送信して下さい。メールの題名は「第四紀学会メール委任状(2014総会)」として下さい。

総 会 委 任 状

2014年 月 日

日本第四紀学会 2014年度総会議長殿

私は、2014年度日本第四紀学会総会における一切の議決権を

- ( ) 会員に委任します。
- 議長に委任します。

上記のどちらかを選択し、にチェックマーク(☑)を記入してください。  
 会員は、総会に出席する会員(1名に限る)に議決権を委任することができます。  
 一人の会員が他の会員から受けられる議決権は1票のみですので、  
 委任する場合は本人の承諾を事前に得たうえで、その会員のお名前をお書きください。

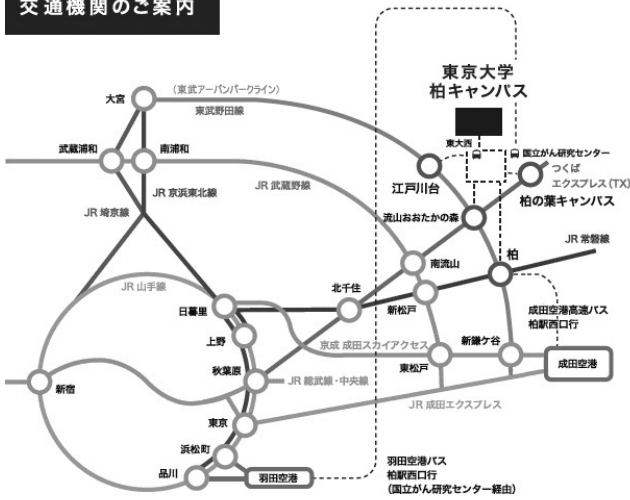
氏名 ( ) (自筆に限る)  
 所属 ( )

◆日本第四紀学会 2014年大会案内 (第4報)

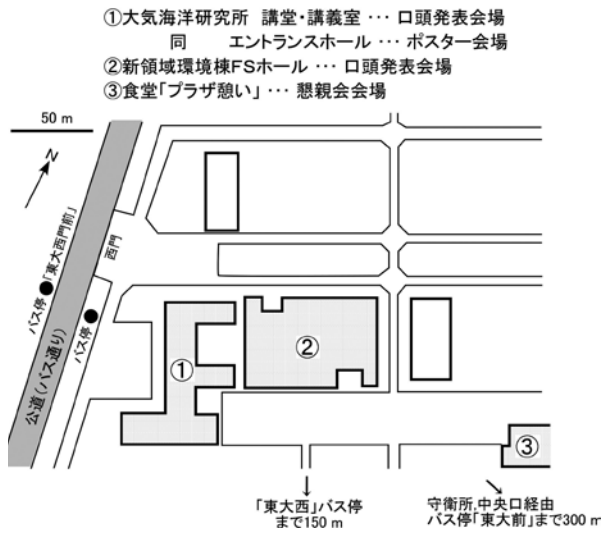
1. 開催地および日程の概要

会場：東京大学柏キャンパス (柏市柏の葉5-1-5) 大気海洋研究所 講堂ほか  
 日程：2014年9月5日(金)～9月9日(火)

交通機関のご案内



【会場のご案内】



## ●キャンパスへのアクセス

## 【最寄り駅からバスで】

柏キャンパスへは東武バス「国立がん研究センター」「柏の葉公園北」「東大前」「東大西」バス停のいずれかで下車。

会場へは「東大西」からが便利です（キャンパス内の配置図を参照）

## ▶柏の葉キャンパス駅西口から（つくばエクスプレス）

東武バス 1番のりばより 6～15分 170円 1時間に4～7便

西柏03 流山おおたかの森駅東口行／西柏03 東大西行／西柏04 江戸川台駅東口行（国立がん研究センター経由）／西柏10 江戸川台駅東口行（みどり台中央経由）

\*西柏10は「柏の葉公園北」「国立がん研究センター」には停車しません。

## ▶柏駅西口から（JR常磐線／東武野田線（東武アーバンパークライン））

東武バス 2番のりばより 約25分 290円 1時間に3～6便

西柏01 国立がん研究センター行（柏の葉公園経由）

## ▶流山おおたかの森駅東口から（つくばエクスプレス／東武野田線（東武アーバンパークライン））

東武バス 1番のりばより 約18分 250円 1時間に1～2便

西柏03 国立がん研究センター行

\*便数が少ないので、ご注意ください。

## ▶江戸川台駅東口から（東武野田線（東武アーバンパークライン））

東武バス 6～10分 190円（西柏04）・200円（西柏10） 1時間に2～3便

西柏04 柏の葉キャンパス駅西口行（国立がん研究センター経由）／西柏10 柏の葉キャンパス駅西口行（みどり台中央経由）

## 【空港から高速バスで】

羽田空港から 羽田空港連絡バス（東武バス・京浜急行バス） 53～78分 1540円

柏駅（柏駅西口）行 「国立がん研究センター」下車

会場	9月6日（土）				9月7日（日）				9月8日（月）			
	時間	大気海洋 研究所 講堂	大気海洋 研究所 講義室	環境棟 FSホール	時間	大気海洋 研究所 講堂	大気海洋 研究所 講義室	環境棟 FSホール	時間	大気海洋 研究所 講堂	大気海洋 研究所 講義室	環境棟 FSホール
AM1	9:00	シンポジ ウムⅣ	シンポジ ウムⅢ	シンポジ ウムⅡ	9:00	一般講演 発表	シンポジ ウムⅤ		9:00	一般講演 発表	シンポジ ウムⅤ	シンポジ ウムⅠ
	10:15				10:15				10:15			
AM2	10:40	シンポジ ウムⅣ	シンポジ ウムⅢ	シンポジ ウムⅡ	10:40	一般講演 発表	シンポジ ウムⅤ	シンポジ ウムⅡ	10:40	一般講演 発表	シンポジ ウムⅤ	シンポジ ウムⅠ
	11:55				11:55				11:55			
Lunch	12:00	昼食			12:00	昼食			12:00	昼食		
	13:30				13:30				13:20			
PM1	13:30	ポスター1 コアタイム 於：大気海洋研究所 エントランス			13:30	一般講演 発表	シンポジ ウムⅤ	シンポジ ウムⅠ	13:20	ポスター2 コアタイム 於：大気海洋研究所 エントランス		
	14:30				14:30				14:20			
PM2	14:40	シンポジ ウムⅣ	シンポジ ウムⅢ	シンポジ ウムⅡ	15:00			総会 表彰式	14:30	一般講演 発表	シンポジ ウムⅤ	シンポジ ウムⅠ
	15:55				16:00							
PM3	16:20	シンポジ ウムⅣ	シンポジ ウムⅢ	シンポジ ウムⅡ	16:00				16:30			
	17:35				17:00							
夜	18:00	評議員会			18:00	懇親会 於：プラザ憩い						
	20:00											

## 2. 発表要領

## 【口頭発表】

- ・一般講演発表、各シンポジウムの一般申し込みの発表、および招待講演の一部は、発表12分、質疑応答3分です。この他、各シンポジウムの招待講演は主に発表25分、質疑応答5分となります。発表時間の厳守をお願いいたします。
- ・会場のプロジェクターへの接続は、講演者ご自身が持参したパソコンを使用して下さい。これはウィルスの汚染・拡散を防ぐことを目的としています。ご理解ご協力をお願いいたします。
- ・パソコンのご持参が難しい方は、シンポジウム発表の場合は各コンピナーへ、一般講演発表の場合は行事企画幹事小森へご相談下さい（jaqua2014(at)gmail.com）。また、添付のプログラムをご確認いただき、前後の発表者のパソコンを共用する等の調整を事前にとっていただくこともご検討下さい。
- ・OHPはありません。

【ポスター発表】

- ・ポスターセッションは大会期間中の一日目(P1-01～P1-29)と、三日目(P2-01～P2-27)に行われます。ポスターの掲示はそれぞれの日の9時から17時までとします。会場は大気海洋研究所エントランスホールです。一日目と三日目の内容は全て入れ替わりますのでご注意ください。
- ・ポスターセッションコアタイムは、9月6日は13:30～14:30、9月8日は13:20～14:20を説明時間帯に設定しています。口頭発表会場でのポスターのショート・サマリー発表はありません。
- ・ポスターボードの大きさは最大で幅90cm×縦140cmとなります(A0版を推奨)。画鋏は会場で貸し出します。
- ・ポスターには発表番号・発表題名・発表者名をタイトルとして明記して下さい。発表番号は本メールに添付のプログラムを参照して下さい。
- ・ポスターは指定されたボード(発表番号が示されています)に掲示して下さい。ポスター会場にはコンピューターなどを使用するための電源はありません。

3. プログラム詳細

受 付：大気海洋研究所 エントランス  
 口頭発表会場：大気海洋研究所 講堂、大気海洋研究所 講義室、環境棟 FS ホール  
 ポスター発表：大気海洋研究所 エントランス  
 懇親会会場：柏キャンパス内「プラザ憩い」

●シンポジウムⅠ「下部－中部更新統境界 GSSP」・・・・・・・・・・・・・・・・

▶▶9月7日

- S1-01 13:30-14:00 熊井久雄(大阪市立) --- L-M 境界 GSSP について  
 S1-02 14:00-14:30 里口保文(琵琶湖博物館) --- 日本の下部・中部更新統基準層序としての上総層群の火山灰層序

▶▶▶9月8日

- S1-03 9:30-9:45 楡井久(MGRI) --- 東京湾不整合について  
 S1-04 9:45-10:00 植木岳雪(千葉科学大) --- 愛知県東部、三好層の古地磁気による編年  
 S1-05 10:00-10:15 木村英人(東邦地水)・風岡修(千葉県環境研)・楡井久(IUGS-GEM) --- 千葉セクションにおける下部－中部更新統境界と Byk zone の分布状況  
 S1-06 10:40-11:10 亀尾浩司(千葉大)・三田勲(日本天然ガス)・佐藤時幸(秋田大) --- 本邦中部における更新統石灰質ナノ化石層序と下部/中部更新統境界との関係  
 S1-07 11:10-11:40 風岡修(千葉地質環境研)・岡田誠(茨城大)・熊井久雄(大阪市大)・菅沼悠介(極地研)・楡井久(IUGS-GEM)・吉田剛・森崎正昭・香川淳・荻津達(千葉地質環境研)・亀山瞬(千葉県環境生活部)・会田信行(秀明大)・西田尚央(産総研)・木村英人(東邦地水) --- 更新統下部－中部境界の国際模式候補地を含む上総層群国本層の Litho-Stratigraphy  
 S1-08 11:40-11:55 加藤茂弘(人と自然博)・兵頭政幸(神戸大)・竹下欣宏(信州大)・檀原徹・岩野英樹(京都FT)・坂田周平・平田岳史(京都大) --- 上総層群白尾テフラと古期御岳テフラ YUT5 の対比と YUT5 の LA-ICP-MS 法による FT 年代および U-Pb 年代  
 S1-09 14:30-15:00 西田尚央(産総研)・風岡修(千葉地質環境研) --- 上総層群国本層下部－中部更新統境界付近の岩相と堆積プロセス  
 S1-10 15:00-15:30 岡田誠・丸岡亨・羽田裕貴(茨城大)・菅沼悠介(極地研)・風岡修(千葉県環境研究) --- 千葉セクションにおける Matuyama-Brunhes 極性境界の古地磁気記録  
 S1-11 15:30-16:00 菅沼悠介(極地研)・岡田誠(茨城大)・堀江憲路・海田博司(極地研)・竹原真美(九州大)・仙田量子・木村純一(JAMSTEC)・川村賢二(極地研)・風岡修(千葉県環境研) --- Byk-E(白尾)テフラの SHRIMP U-Pb 年代に基づく M-B 境界年代値の高精度決定  
 S1-12 16:00-16:15 兵頭政幸・北場育子(神戸大) --- MIS19 における地磁気逆転、最温暖化、最高海水準のタイミング  
 S1-13 16:15-16:30 竹下欣宏(信州大)・松島信幸・寺平宏(伊那谷自然友の会)・内山高(富士山科学研)・熊井久雄(大阪市大) --- 前期-中期更新世境界層準の指標テフラ層－御岳白尾テフラ

●シンポジウムⅡ「更新世・完新世の資源環境と人類」・・・・・・・・・・・・・・・・

▶9月6日

- S2-01 9:00-9:30 近藤康久(地球研) --- 生態ニッチモデルで旧石器遺跡の立地環境を評価する  
 S2-02 9:30-9:45 森先一貴(奈良文化財研究所) --- 更新世末の九州地方における資源環境と人間行動  
 S2-03 9:45-10:00 吉田明弘(明治大) --- 中部高地における旧石器時代以降の景観変化と黒耀石の獲得方法の連動性  
 S2-04 10:00-10:15 島田和高・橋詰潤・吉田明弘・小野昭(明治大) --- 長野県広原遺跡群の発掘調

- 査と中部高地における EUP 石器群
- S2-05 10:40-10:55 橋詰 潤 (明治大学黒耀石研究センター) --- 更新世終末の中部・関東における狩猟具利用の変遷について
- S2-06 10:55-11:25 能城修一 (森林総研) --- 縄文時代における森林資源の管理と利用—その発生と、展開、終焉
- S2-07 11:25-11:40 工藤雄一郎 (国立歴史民博) --- 縄文時代草創期における土器の利用と古環境
- S2-08 11:40-11:55 一木絵理 (土浦市)・松本優衣 (千葉県)・辻 誠一郎 (東京大)・杉山陽亮・村木 淳・宇部則保 (八戸市)・中村俊夫 (名古屋大) --- 八戸・上北地域における縄文海進期の古環境と人類活動
- S2-09 14:40-14:55 佐々木由香 (パレオ・ラボ) --- 縄文時代の編組製品の加工技術と素材の地域性
- S2-10 14:55-15:10 中山誠二 (山梨県) --- 縄文時代の栽培植物と二次植生の利用
- S2-11 15:10-15:25 那須浩郎 (総研大) --- 縄文時代から弥生時代への移行期におけるイネと雑穀の栽培
- S2-12 15:25-15:40 辻 誠一郎 (東京大) --- 人為生態系としての集落生態系の研究
- S2-13 15:40-15:55 吉川昌伸 (古代の森研究舎) --- 縄文時代の人為生態系
- S2-14 16:20-16:35 千葉敏朗 (東村山ふるさと歴史館) --- 下宅部遺跡におけるウルシ林の管理技術
- S2-15 16:35-16:50 安 昭炫 (パレオ・ラボ) --- 青谷上寺地遺跡における弥生時代の集落生態系
- S2-16 16:50-17:05 安達香織 (地球研) --- 東北地方北部における縄紋時代中期—後期の地域社会と生業
- S2-17 17:05-17:35 羽生淳子 (地球研、UC パークレー校) --- 歴史生態学から見た生業・集落システム
- ▶▶ 9月7日
- S2-18 10:40-11:10 佐瀬 隆 (北方ファイトリス研究室)・細野 衛 (東京自然史研究機構) --- 黒ボク土層の生成史:人為生態系の観点から
- S2-19 11:10-11:25 小荒井 衛 (国土交通大学校)・中埜貴元 (地理院)・長澤良太・日置佳之 (鳥取大) --- 鉄穴流しによる地形改変・植生改変箇所を航空レーザで捉える
- S2-20 11:25-11:40 中村俊夫 (名古屋大)・常木 晃 (筑波大) --- イランの初期農耕牧畜集落 Sang-e Chakhmaq 遺跡の <sup>14</sup>C 年代
- S2-21 11:40-11:55 森下瑞貴 (首都大)・川東正幸 (首都大) --- 相模平野に分布する埋没泥炭の分解過程—化学構造解析からの検討—

### ●シンポジウムⅢ「プレート沈み込み境界における古地震・津波研究」・・・・・・・・・・・・・・・・

- ▶ 9月6日
- S3-01 9:00-9:15 藤原 治 (産総研) --- 南海トラフ東部での巨大地震に関連した地殻変動検出の試み
- S3-02 9:15-9:30 佐藤善輝・藤原 治 (産総研)・小野映介 (新潟大) --- 浜松平野西部における完新世後期の砂州地形の発達過程
- S3-03 9:30-9:45 北村晃寿 (静岡大) --- 伊豆半島南部、静岡・清水平野の古地震・古津波堆積物
- S3-04 9:45-10:00 林崎 涼・白井正明 (首都大) --- 津波堆積物の正確な堆積年代推定における光ルミネッセンス年代測定法の有効性
- S3-05 10:00-10:15 青島 晃 (磐田南高校) --- 静岡県磐田市太田川河口周辺で見られる津波堆積物中の礫と砂の組成
- S3-06 10:40-10:55 大谷宏治 (静岡県) --- 静岡の遺跡から東海地震の歴史を探る
- S3-07 10:55-11:10 後藤和久 (東北大)・菅原大助 (東北大) --- 津波堆積物を用いた古津波規模の推定にむけて
- S3-08 11:10-11:25 岩田孝仁 (静岡県) --- 巨大地震・津波に備える地域防災
- S3-09 11:25-11:55 入江さやか (NHK) --- 放送メディアの南海トラフ巨大地震対策
- S3-10 14:40-15:10 金子浩之 (静岡県伊東市) --- 歴史・考古資料に基づく明応四年 (1495) 関東地震の再評価
- S3-11 15:10-15:25 藤村 翔 (富士市立博) --- 6世紀における富士川河口断層帯活動の可能性—富士市・沢東 A 遺跡の調査から—
- S3-12 15:25-15:40 萬年一剛・金 幸隆 (神奈川県温泉地学研)・松島義章 (神奈川県生命の星・地球博) --- 神奈川県鎌倉市および逗子市における海岸低地の離水時期
- S3-13 15:40-15:55 石村大輔 (東北大)・宮内崇裕 (千葉大)・早瀬亮介 (加速器分析研究所) --- 岩手県山田町小谷島に分布する古津波堆積物と歴史津波との対比
- S3-14 16:20-16:35 卜部厚志 (新潟大)・山本博文・佐々木直広 (福井大)・清水水康博・片岡香子 (新潟大) --- 若狭湾沿いの海岸平野における津波堆積物調査
- S3-15 16:35-16:50 鎌滝孝信 (秋田大学)・丹羽正和 (原子力機構)・生田正文 (JX 日鉱日石探開)・黒澤英樹 (応用地質)・高取亮一 (地圏総合コンサルタント) --- 宮崎平野南部の沖積低地に記録された歴史地震の痕跡と津波堆積物
- S3-16 16:50-17:05 岩本広志 (関東天然瓦斯開発)・阿部裕寛 (興亜開発)・東 将士 (石油資源開発)・樋口茂生・稲田 晃・伊藤彰秀 (千葉北高校)・上加世田 聡 (NTC コンサルタンツ)・川崎健一・

- 楠 恵子 (浦安高校)・佐藤伸司 (千城台高校)・品田正一 (石油資源開発)・末永和幸 (地球システム科学)・渡邊拓美 --- 東京湾臨海部の埋立層における地震災害事例研究
- S3-17 17:05-17:20 鈴木輝美 (専修大)・荻谷愛彦 (専修大) --- 御坂山地西部、四尾連湖周辺に形成された更新世後期の複数の古湖沼
- S3-18 17:20-17:35 木田千鶴 (専修大)・荻谷愛彦 (専修大)・清水長正 (駒澤大) --- 秩父山地、瑞牆山西麓における緩斜面群の発達と年代

●シンポジウムⅣ「東アジア～北西太平洋域における第四紀の気候と環境変動」・・・・・・・・・・

▶ 9月6日

- S4-01 9:00-9:15 公文富士夫 (信州大) --- 日本周辺における第四紀後期の気候変動資料の集成と標準層序の提案 —シンポジウムⅣの序を兼ねて—
- S4-02 9:15-9:45 中川 毅 (立命館大) --- 水月湖ダイジェスト:「名前は知ってる」人のための総集編
- S4-03 9:45-10:00 木越智彦・公文富士夫 (信州大)・河合小百合 (元信州大)・叶内敦子 (明治大) --- 花粉組成におけるモダンアナログ法の新たな表層花粉データによる、中部山岳地域における過去 16 万年間の気候変動の復元
- S4-04 10:00-10:15 高原 光・河合貴則 (京都府大)・百原 新 (千葉大)・佐々木尚子 (京都府大)・林 竜馬 (琵琶湖博)・植村善博 (佛教大)・中川和哉 (京都府) --- 京都府南西部亀岡盆地と神吉盆地の MIS3 層準から得られた古生態学的資料
- S4-05 10:40-10:55 百原 新 (千葉大)・植木岳雪 (千葉科学大)・齊藤 毅 (名城大) --- 新潟県魚沼層群の大型植物化石群によるカラブリアン (1.8 ~ 0.78Ma) の氷期・間氷期の古気温復元
- S4-06 10:55-11:10 石川 智 (名古屋大)・鹿島 薫 (九州大)・篠田雅人 (名古屋大) --- モンゴルにおける環境変遷史・災害発生史
- S4-07 11:10-11:25 佐川拓也 (九州大) --- 有孔虫複数種の Mg/Ca 古水温から探る北西太平洋～縁海の新環境
- S4-08 11:25-11:40 平林頌子・横山祐典 (東京大)・鈴木 淳 (産総研)・川久保友太・宮入陽介 (東京大)・岡井貴司 (産総研)・野島 哲 (九州大) --- 高緯度サンゴを用いた酸素同位体比 ( $\delta^{18}\text{O}$ ) と Sr/Ca 比の水温復元可能性
- S4-09 11:40-11:55 都築賢伍・横山祐典・川久保友太・窪田 薫・関 有沙 (東京大)・荒岡大輔・鈴木 淳 (産総研) --- LA-HR-ICPMS による石垣島津波石サンゴ化石を用いた古気候復元
- S4-10 14:40-15:10 山本正伸 (北海道大)・加 三千宣 (愛媛大)・守屋和桂 (金沢大)・吉森正和・阿部彩子 (東京大)・竹村恵二 (京都大)・池原 研 (産総研)・小端拓郎 (極地研) --- 別府湾堆積物コアの古水温解析にもとづく過去 2900 年間の太平洋十年規模変動の復元
- S4-11 15:10-15:25 池原 実 (高知大)・木元克典 (JAMSTEC) --- 四国沖黒潮域における完新世の表層水温変動
- S4-12 15:25-15:40 長島佳菜 (JAMSTEC)・豊田 新 (岡山理科大)・多田隆治 (東京大) --- 完新世における偏西風—東アジア夏季モンスーンの千年スケール変動
- S4-13 15:40-15:55 青木かおり (立正大)・朝日博史 (釜山大)・坂本竜彦 (三重大) --- ベーリング海掘削コア U1343 中の過去 240 万年間におけるテフラ粒子含有砂層の層位
- S4-14 16:20-16:50 川村賢二 (国立極地研) --- 極域アイスコアから見る退氷期と間氷期
- S4-15 16:50-17:20 阿部彩子 (東京大) --- 氷期気候—氷床—大気海洋大循環変動とその東アジアへの影響
- S4-16 17:20-17:35 総合討論

●シンポジウムⅤ「第四紀の海水準変動と地球表層プロセス」・・・・・・・・・・

▶▶ 9月7日

- S5-01 9:00-9:30 多田隆治 (東京大) --- 東アジアモンスーンの変動とその時代変化
- S5-02 9:30-9:45 久保田好美 (科博)・木元克典 (JAMSTEC)・多田隆治 (東京大)・内田昌男 (環境研)・池原 研 (産総研) --- 東シナ海における最終融氷期以降の黒潮の変動
- S5-03 9:45-10:00 関 有沙・横山祐典・宮入陽介・中村淳路 (東京大)・鈴木 淳 (産総研)・菅 浩伸 (九州大)・松崎浩之 (東京大)・Tezer Esat・Stephen Eggins (オーストラリア国立大) --- 放射性炭素年代測定法とウラン系列核種年代測定法を用いた日本の石筍の年代測定
- S5-04 10:00-10:15 奈良郁子・渡邊隆広・掛川 武・箕浦幸治 (東北大)・堀内一穂 (弘前大)・宮原ひろ子 (武蔵野美術大)・オブラクタスティープン・山崎慎一・土屋範芳 (東北大)・中村俊夫 (名古屋大)・志知幸治 (森林総研)・河合崇欣 (名古屋大) --- 大陸内部湖沼堆積物に記録された最終氷期最盛期における 1000 年周期降水量変動
- S5-05 10:40-11:10 大河内直彦・菅 寿美 (JAMSTEC)・松崎浩之 (東京大)・横山祐典 (東京大) --- 化合物レベル  $^{14}\text{C}$  年代と  $^{10}\text{Be}$  を用いた西南極氷床の動態研究
- S5-06 11:10-11:25 吉村寿紘・若木重行・石川剛志・大河内直彦 (JAMSTEC) --- ストロンチウム安

- 定同位体比 ( $^{88}\text{Sr}/^{86}\text{Sr}$ ) の古海洋学
- S5-07 11:25-11:40 山根雅子 (JAMSTEC)・横山祐典・Stephen Obrochta・阿部彩子 (東京大)・齋藤冬樹 (JAMSTEC)・森脇喜一 (元・極地研)・松崎浩之 (東京大) --- 鮮新世-更新世における東南極氷床変動
- S5-08 11:40-11:55 中村淳路・横山祐典・宮入陽介・松崎浩之 (東京大) --- 侵食速度の氷期-間氷期変動: 宇宙線照射生成核種の深度プロファイルによる復元
- S5-09 13:30-14:00 堀 和明 (名古屋大)・田辺 晋 (産総研) --- 日本における近年の沖積層研究
- S5-10 14:00-14:30 高田将志 (奈良女子大)・島田愛子 (JEOL RESONANCE)・濱田菜月 (奈良女子大)・越後智雄 (地域地盤)・小俣雅志・郡谷順英 (クレアリア)・市川清士 (駒沢大) --- 光ルミネッセンス法による変質したサンゴの年代推定

## ▶▶▶ 9月8日

- S5-11 9:00-9:30 Helena L. Filipsson・Anna Broström (スウェーデン・ルンド大)・豊福高志 (JAMSTEC) --- モデルと環境指標から解き明かす陸-水圏-人間圏相互作用
- S5-12 9:30-9:45 廣瀬孝太郎 (福島大)・後藤敏一 (近畿大)・安原盛明 (香港大)・三田村宗樹・吉川周作 (大阪市大) --- 大阪湾における珪藻群集の時空間分布と完新世の環境変化
- S5-13 9:45-10:15 斎藤文紀 (産総研) --- デルタイニシアティブ: Sustainable Deltas 2015
- S5-14 10:40-11:10 藤本 潔 (南山大)・Kim Cohen (ユトレヒト大)・宮城豊彦 (東北学院大) --- 海岸低湿地における地形、生物、人為プロセス
- S5-15 11:10-11:25 宮城豊彦 (東北学院大) --- マングローブ湿地における地形、生物、人為プロセス
- S5-16 11:25-11:55 片岡香子 (新潟大) --- 火山性大規模洪水の堆積学と地形学: 扇状地・段丘形成の別視点
- S5-17 14:30-15:00 田村 亨 (産総研) --- 南シナ海の沿岸堆積システムにおけるモンスーンの影響
- S5-18 15:00-15:15 横山祐典 (東京大) --- 過去の海水準復元と古気候
- S5-19 15:15-15:30 渡邊隆広・奈良郁子 (東北大)・松中哲也 (筑波大)・山崎慎一・土屋範芳・箕浦幸治 (東北大)・中村俊夫 (名古屋大)・掛川 武 (東北大)・Nathalie FAGEL (リエージュ大)・Liping ZHU・Junbo WANG (中国科学院)・西村弥垂 (東海大) --- チベット高原プマコムツォ湖堆積物の無機化学組成による過去約 12,500 年間のモンスーン活動の復元
- S5-20 15:30-15:45 菅 浩伸 (九州大)・浦田健作 (大阪経法大)・長尾正之 (産総研)・堀 信行 (奈良大)・藤田和彦 (琉球大 理学部)・横山祐典 (東京大)・中島洋典 (有明高専)・橋 倫也 (九州大)・後藤和久 (東北大)・鈴木 淳 (産総研) --- 石垣島名蔵湾における沈水カルスト地形の発見とその第四紀学的意義
- S5-21 15:45-16:00 葛西未央・小岩直人 (弘前大) --- 八郎潟における完新世中期の砂州の形成とラゲーン環境の成立
- S5-22 16:00-16:15 オブラクタ ステファン・横山祐典 (東京大) --- コア写真からの色彩値 ( $L^*$ 、 $a^*$ 、 $b^*$ ) への変換ソフトウェアの紹介
- S5-23 16:15-16:30 石輪健樹・横山祐典・宮入陽介・Obrochta Stephen・佐々木猛智 (東京大)・鈴木 淳 (産総研)・池原 実 (高知大)・池原 研 (産総研)・木元克典 (JAMSTEC)・Julien Bourget (西オーストラリア大)・松崎浩之 (東京大) --- 最終氷期最盛期における Bonaparte 湾の相対的海水準変動

## ●一般講演発表・・

## ▶▶▶ 9月7日

- 一般-01 9:00-9:15 西澤文勝・鈴木毅彦 (首都大) --- 熊本県二見盆地に分布する火砕流堆積物の記載岩石学的特徴
- 一般-02 9:15-9:30 中沢祐一 (北海道大) --- 完新世の考古遺跡に関する黒耀石水和層年代
- 一般-03 9:30-9:45 大石雅之 (立正大)・下司信夫 (産総研) --- 火山灰中のガラス質発泡粒子含有量は何を意味するか
- 一般-04 9:45-10:00 鈴木毅彦・中島絵理・笠原天生・西澤文勝・寺口慧介 (首都大)・青野道夫 (サンコア) --- 立川断層帯を挟む 2 本のボーリングコアに含まれる武蔵村山市榎の前期更新世テフラ
- 一般-05 10:00-10:15 田村糸子 (首都大)・森 勇一 (金城学院大)・田中里志 (京都教育大)・宇佐美 徹 (杏和高校)・津村善博・中川良平 (三重県総合博物館) --- 三重県亀山地域に分布する東海層群の新第三紀/第四紀境界層準の広域テフラ対比
- 一般-06 10:40-10:55 中里裕臣 (農工研/産総研)・七山 太 (産総研) --- 茂原地域の上総層群笠森層のテフラ
- 一般-07 10:55-11:10 大井信三 (国土地理院)・西連地信男 (白方小学校)・横山芳春 (地盤ネット (株))・安藤寿男 (茨城大) --- 茨城県涸沼周辺の更新統下総層群の層序と年代
- 一般-08 11:10-11:25 雨川翔太・横山祐典・窪田 薫・関 有沙・宮入陽介 (東京大)・坂井三郎 (JAMSTEC)・P. Ajithprasad (マハーラージャ・サヤジラーオ大学)・前李英明 (法政大)・長田俊樹 (地球研) --- 西インド、カッチ湾の化石耳石による中期-後期完新世環境復元

## 2014年大会案内

- 一般-09 11:25-11:40 川幡穂高・山下宗佑(東京大)・山岡香子・岡井貴司・下田 玄・今井 登(産総研) --- 8世紀の奈良平城京における重金属汚染と古代の消費社会からエコ社会への移行
- 一般-10 13:30-13:45 河村善也(愛知教育大)・河村 愛(大阪市大)・村田 葵(駿台予備校) --- 本州北部の第四紀後期哺乳類化石群集についての最近の研究
- 一般-11 13:45-14:00 河村 愛(大阪市大)・河村善也(愛知教育大) --- 琉球列島の第四紀後期哺乳動物群についての最近の研究
- 一般-12 14:00-14:15 千葉 崇(筑波大)・澤井祐紀(産総研) --- 環境指標種群の更新と課題
- 一般-13 14:15-14:30 紀藤典夫(北教大函館)・大瀧 絢(東邦システムサイエンス)・水口笑美子 --- 北海道南部におけるブナの最終氷期逃避地仮説の再検討
- ▶▶▶ **9月8日**
- 一般-14 9:15-9:30 北場育子・兵頭政幸(神戸大)・加藤茂弘(人と自然博)・David L. Dettman(アリゾナ大)・佐藤裕司(兵庫県立大) --- 地球磁場の弱まりがもたらした気候寒冷化とモンスーン変動
- 一般-15 9:30-9:45 白濱吉起(東京大)・宮入陽介(AORI)・何 宏林(中国地震局)・傅 碧宏(中国科学院)・狩野謙一(静岡大)・越後智雄(GRI)・横山祐典(AORI)・池田安隆(東京大) --- 表面照射年代法によるチベット高原北縁 Kumkol 盆地内の気候変動に伴う段丘発達過程の復元
- 一般-16 9:45-10:00 関根達夫(最終氷期勉強会) --- 4.1 万年前、支笏火砕流堆積物(Spfl)が豊平川を堰止めて“古藤野湖”を形成した
- 一般-17 10:00-10:15 石原武志・水野清秀(産総研) --- オールコア試料とボーリング資料の解析に基づく三保半島の発達過程
- 一般-18 10:40-10:55 坂本 勉(金沢大) --- 加越台地北部(橋立丘陵)沿岸部の海成段丘
- 一般-19 10:55-11:10 佐藤智之(産総研) --- 各氷期における海岸線位置、古平野面の高度差と構造運動:北海道南部勇払平野沿岸の例
- 一般-20 11:10-11:25 大上隆史(中央大) --- 三陸海岸北部における遷急点を伴う河川の河床縦断形進化モデル
- 一般-21 11:25-11:40 長岡大輔(琥珀舎)・古沢 仁(札幌市)・重野聖之・有賀 誠・高橋 緑・山本圭一(明治コンサルタント)・丸谷 薫(北海道立地質研)・池田隆司(元北海道大学) --- 豊平川扇状地の詳細地形の復元と湧水点(メム)の分布
- 一般-22 11:40-11:55 中条武司(大阪市立自然史博)・三田村宗樹・奥平敬元(大阪市立大)・菅森義晃(鳥取大) --- 大阪府レッドリスト地形・地質版の作成とその課題
- 一般-23 14:30-14:45 金 幸隆・萬年一剛(温地研)・熊木洋太(専修大)・松島義章(神奈川県生命の星・地球博) --- 関東地震の最近三回の履歴と地殻変動の蓄積:三浦半島南部の谷底低地の形成過程から
- 一般-24 14:45-15:00 岡田篤正(京都大)・加藤茂弘(人と自然博)・石村大輔(東北大)・山田圭太郎(京都大)・戸田 茂(愛知教育大) --- 袋状埋積谷に着目した湖北地域における伏在活断層の地下構造と形成過程
- 一般-25 15:00-15:15 山田圭太郎・岡田篤正(京都大)・加藤茂弘(人と自然博)・石村大輔(東北大) --- 福井県敦賀市内池見における池見断層の形状と活動性
- 一般-26 15:15-15:30 岡崎浩子(千葉中央博)・田村 亨(産総研)・中里裕臣(農工研)・郭 栄珠(土木研)・加藤久佳(千葉中央博)・石井明夫 --- GPR(地中レーダ)探査による堆積物の3次元解析—その適用例

## ●ポスターセッション (括弧のギシリヤ数字は関連のシンポジウムの番号を示す) . . . . .

- ▶ **9月6日**
- P1-01 小松原 琢(産総研) --- 房総半島・久留里~大多喜間の上総層群上部の予察地質図(I)
- P1-02 南雲直子(土木研)・久保純子(早稲田大)・須貝俊彦(東京大) --- さいたま市田島ヶ原サクラソウ自生地周辺の土地利用と表層地質(II)
- P1-03 小椋純一(京都精華大) --- 森林火災跡地に残された微粒炭等炭化物についての基礎的研究(4)(II)
- P1-04 丹羽雄一・遠田晋次(東北大)・須貝俊彦(東京大) --- 陸前高田平野完新統の堆積過程と推定される地殻変動(III)
- P1-05 石村大輔(東北大)・宮内崇裕(千葉大) --- 宮城県南三陸町大沼に分布する古津波堆積物とその規模に関する予察(III)
- P1-06 重野聖之(明治コンサルタント)・七山 太・渡辺和明・吉川秀樹(産総研)・長谷川 健(茨城大)・池田保夫(北海道教育大)・五十嵐八枝子(北方圏古環境研究室)・秋葉文雄(珪藻ミニラボ)・内田康人(道総研・地質研)・石渡一人(別海町郷土資料館) --- 風蓮湖、走古丹バリアースピットの地形発達史から読み解く根室海峡沿岸域の完新世海面変動と地殻変動(III)
- P1-07 奈良郁子・渡邊隆広・掛川 武・山崎慎一・井上千弘・土屋範芳(東北大) --- 安定硫黄同位体組成( $\delta^{34}\text{S}$ )を指標とした東北地方太平洋沖地震による津波堆積物の供給源推定(III)
- P1-08 渡邊隆広・土屋範芳・山崎慎一・細田憲弘(東北大)・澤井祐紀(産総研)・駒井 武(東北大)・



- 中村俊夫（名古屋大）・奈良郁子（東北大）・東北大学津波堆積物調査グループ --- 無機化学組成にもとづく歴史津波堆積物の供給源推定（Ⅲ）
- P1-09 佐藤善輝（産総研）・安江健一（日本原子力研究開発機構）・須貝俊彦（東京大）--- 後期更新世以降における岐阜県大湫盆地の堆積環境変遷（Ⅳ）
- P1-10 朴木英治（富山市科学博）・堀川恵司（富山大）・渡辺幸一（富山県立大）--- 立山弥陀ヶ原湿原の泥炭の堆積年代と含まれる強熱残渣粒子の存在量（Ⅳ）
- P1-11 渋谷早苗・兵頭政幸・北場育子（神戸大）・柏谷健二（金沢大）--- チベット高原東部 Qionghai 湖周辺域の環境変化と人間活動（Ⅳ）
- P1-12 永安浩一・公文富士夫（信州大）・大谷裕美（元信州大）--- 後期更新世高野層ボーリングコア TKN-2004 の珪藻化石群集解析（Ⅳ）
- P1-13 豊田和弘（北海道大）・米田成一（科博）・米延仁志（鳴門教育大）--- 小川原湖コア堆積物中の Sr 同位体比—古塩分濃度の復元指標（続報）（Ⅳ）
- P1-14 内藤慶一（東京大 大気海洋研）・横山祐典（東京大 大気海洋研）・高橋理美（東京大 大気海洋研）・中野孝教（地球研）・竹村恵二（京都大）--- 琵琶湖湖底堆積物中の微量元素同位体からの集水域環境復元（Ⅳ）
- P1-15 滝沢侑子・ト部 輔・公文富士夫（信州大）--- 日本海、隠岐堆コア（MD01-2407）の過去 60 年間の有機炭素量変動とその意味
- P1-16 菅沼悠介（極地研）・三浦英樹（極地研）・Albert Zondervan（GNS, NZ）・奥野淳一（極地研）--- 第四紀における東南極氷床高度の低下と南極寒冷圏システム進化との相互作用（Ⅴ）
- P1-17 中野恒佑・北場育子（神戸大）・加藤茂弘（人と自然博）・兵頭政幸（神戸大）--- 大阪湾堆積物コアの花粉記録から見た海洋酸素同位体ステージ 11 の気候変化（Ⅴ）
- P1-18 前垣内健太・北場育子・兵頭政幸（神戸大）・佐藤裕司（兵庫県立大）--- 大阪湾堆積物コアの珪藻分析による MIS 19 の海面変化（Ⅴ）
- P1-19 高橋尚志・白井正明（首都大）--- 礫の大きさと円磨度からみた氷期・間氷期の河成段丘構成層の違い—多摩川の河成段丘を例にして—（Ⅴ）
- P1-20 及川輝樹（産総研）・古澤 明（古澤地質）--- 黒部川扇状地の段丘形成時期（Ⅴ）
- P1-21 齋藤めぐみ（科博）・中川 毅（立命館大）・多田隆治（東京大）・水月湖 2006 年プロジェクトメンバ --- 福井県水月湖堆積物に含まれる珪藻群集から推定された環境変動（Ⅴ）
- P1-22 近藤玲介（明治大）・五十嵐八枝子（北方圏古環境研）・塚本すみ子（Leibnitz Institute）--- 北海道北部、頓別平野周辺における海成／河成段丘の pIRIR 年代と MIS 9 海成層の花粉記録（Ⅴ）
- P1-23 古川理央・須貝俊彦（東京大）・松本 良（明治大）--- MD-179 コアの元素分析に基づく第四紀後期の日本海上越沖の堆積環境復元（Ⅴ）
- P1-24 宮入陽介・阿瀬貴博・横山祐典（東京大）--- 放射性炭素年代測定における安定炭素同位体比測定の重要性（Ⅴ）
- P1-25 土生居 弘 --- 日本列島周辺の海底林（一般）
- P1-26 清永丈太（東京都）--- クロマツ林の花粉粒生産量（一般）
- P1-27 天野敦子・板木拓也（産総研）--- 沖縄トラフ—琉球海溝海域の過去 25 万年間の堆積環境変化（一般）
- P1-28 早瀬亮介・小原圭一・小川俊之（加速器分析研究所）・辻 智大・池田倫治（四国総研）・大西耕造・西坂直樹（四国電力）--- 四国西部宇和盆地において AT の上下に堆積した有機質堆積層の  $^{14}\text{C}$  年代（一般）
- P1-29 七山 太（産総研）・中里裕臣（農工研／産総研）・大井信三（国土地理院／産総研）・中島 礼（産総研）--- 5 万分の 1 地質図幅「茂原」の第四紀地質（一般）
- ▶▶▶ **9月8日**
- P2-01 渡邊隆広・土屋範芳・後藤章夫・平野伸夫・宇野正起（東北大）・松中哲也（筑波大）・細田憲弘（東北大）・東北大学蔵王御釜調査グループ --- 蔵王火山御釜湖沼および丸山沢噴気地熱地帯温泉水の地球化学分析（一般）
- P2-02 白井正明（首都大）・大村亜希子（東京大）・林崎 涼・宇津川喬子（首都大）--- 20 世紀後半における新潟沖日本海深海底での堆積速度変化（一般）
- P2-03 佐藤裕司（兵庫県立大）・小原正顕（和歌山県立自然博）・加藤茂弘（兵庫県立人と自然の博）・伊藤 謙・高橋京子・上田貴洋・橋爪節也・江口太郎（大阪大）・渡辺克典（きしわだ自然資料館）・小栗一輝（大阪大）・林 昭次（大阪市立自然史博）・小林快次（北海道大）--- マチカネワニ化石産出層（大阪層群中部更新統）における堆積環境の再検討（一般）
- P2-04 五島朋子・佐竹健治・須貝俊彦・石辺岳男・原田智也・室谷智子（東京大）--- 15 世紀以降の歴史津波堆積物についての堆積年代推定—三陸海岸宮古市沼の浜の例—（一般）
- P2-05 宇津川 徹（カテナ研究所）--- テフラ中の動物珪酸体について—同定とその意義—（一般）
- P2-06 陳 永利・阿部彩子（東京大）・大石龍太（極地研、東京大）・高橋邦生（海洋気候）--- 亜氷期と亜間氷期の気候シミュレーション：モデル結果及びプロキシデータとの比較（一般）

- P2-07 北田奈緒子(地域地盤環境研)・渡辺公一郎(九州大)・田中礼司(地域地盤環境研)・西島潤・藤光康宏・下山正一(九州大)・井上直人(地域地盤環境研) --- 福岡平野におけるボーリングデータベースの作成と地盤情報から見る地域の特徴(一般)
- P2-08 山市剛・須貝俊彦(東京大) --- 東北日本、山田平野における完新世の環境変遷(一般)
- P2-09 窪田薫・横山祐典(東京大)・石川剛志(JAMSTEC)・鈴木淳(産総研) --- 20世紀の北西太平洋の海洋酸性化と小笠原父島で得られたハマサンゴとの関係(一般)
- P2-10 竹本弘幸(拓殖大) --- 史料から見た磐梯山噴火の再検討(その5)(一般)
- P2-11 佐々木夏来・須貝俊彦(東京大) --- 安比高原奥の牧場の凹地形成と湿地の発達過程(一般)
- P2-12 井内美郎(早稲田大)・山田和芳(ふじのくに地球環境史ミュージアム)・里口保文・芳賀裕樹・林竜馬(滋賀県立琵琶湖博) --- 琵琶湖愛知川沖試料から推定される過去約5万年間の湖水位変動(一般)
- P2-13 松下隼人・兵頭政幸・高崎健太・北場育子(神戸大)・加藤茂弘(人と自然博)・北村晃寿(静岡大)・岡田誠(茨城大) --- 上総層群国本層の定方位コアのdiscrete試料の古地磁気分析(一般)
- P2-14 長井大輔(雲仙岳災害記念館) --- 雲仙普賢岳噴火災害の埋没民家で発見されたかまど跡と被災物の保存活用(一般)
- P2-15 寺口慧介・鈴木毅彦(首都大)・中山俊雄(東京都) --- クリプトテフラを用いたテフロクロノロジーによる武蔵野台地北西部、金子台・所沢台の編年(一般)
- P2-16 趙哲済(大阪文化財研)・中条武司(大阪自然史博)・松田順一郎(鴻池新田会所) --- 難波砂州における縄文時代後期以降の古地理の変遷(一般)
- P2-17 横田彰宏・鈴木毅彦(首都大) --- 西南北海道、瀬棚平野における下部更新統テフラ(一般)
- P2-18 向山千晴・鈴木毅彦(首都大) --- 榛名火山噴出物からみた6世紀前後の利根川流路の検討(一般)
- P2-19 井上直人・北田奈緒子(地盤研究財団)・竹村恵二(京都大) --- ボーリングデータベースおよび数値シミュレーションによる上町断層傾斜角の検討(一般)
- P2-20 三浦知督(金沢大)・鷹澤好博(北海道教育大)・長谷部徳子(金沢大) --- UV-TL法を用いた活断層ガウジの測定(一般)
- P2-21 村田昌則・鈴木毅彦(首都大) --- 東京都目黒区林試の森公園および品川区戸越地下の上総層群中に挟在するテフラ(一般)
- P2-22 西内李佳(千葉大)・新井悠介(明治コンサルタント)・百原新(千葉大)・近藤玲介(明治大)・宮入陽介・横山祐典(東京大) --- 甲府盆地南東部の山地域の最終氷期最寒冷期前後の古植生(一般)
- P2-23 長井雅史(防災科研)・金成太郎(日本公園緑地協会)・柴田徹(東海大)・土屋美穂(明治大)・弦巻賢介(明治大)・杉原重夫(明治大)・八幡正弘(マイジオ) --- 北海道白滝地域から噴出した大規模テフラとカルデラ状盆地の形成について(一般)
- P2-24 添田雄二(道開拓記念館)・渡邊剛(北海道大)・宮地鼓(苫小牧市美博)・上中央子(奈文研)・杉山真二(古環境研)・渋谷綾子(歴博)・青野友哉・永谷幸人(伊達市噴火湾文化研) 北海道伊達市有珠における小氷期最寒冷期の古環境―陸上および海洋環境、積雪量等の復元と人との関わり―(一般)
- P2-25 納多哲史(京都大)・水田亮・出牛真(気象研)・小寺邦彦(名古屋大)・吉田康平(気象研)・鬼頭昭雄(気象研・筑波大)・村上茂教(気象大学院)・足立恭将(気象研)・余田成男(京都大) --- 地球システムモデルにおけるオゾンの取り扱いが古気候に与える影響: 完新世中期の南極(一般)
- P2-26 七山太(産総研)・前野深(東京大)・中川正二郎・佐々木洋之(屋久島地学同好会)・面将道(屋久島町教育委員会)・下司信夫・渡辺和明(産総研)・成尾英仁(武岡台高校)・小林哲夫(鹿児島大) --- 屋久島北東部の完新世海面変動から見た鬼界カルデラ噴火津波痕跡についての一考察(一般)
- P2-27 細野衛(東京自然史研究機構)・佐瀬隆(北方ファイトリス研究室) --- 広原遺跡群土層の植物珪酸体記録によるMIS5a以降のササ類の地史的動態(一般)

●総会・表彰式 9月7日 15:00～17:00 環境棟 FS ホール

●若手賞は大会終了後に発表します。受賞者には賞状と副賞をお贈りします。

●懇親会に参加される方は申し込みをお願いいたします●

日時: 9月7日(日) 18:00～(予定)

会場: 東京大学 柏キャンパス内「プラザ憩い」

参加費: 一般 5,000円(予約: 当日申し込みは 6,000円)、学生 2,500円

予約: 8月18日(月)までに e-mail: jaqua2014(at)gmail.com で大会実行委員会(懇親会担当)・小口までご連絡下さい。

## ◆ 2014 年日本第四紀学会学会賞・学術賞、論文賞・奨励賞受賞者決定

日本第四紀学会では、学会賞・学術賞、論文賞・奨励賞を設け、顕彰を行っております。2014 年の各賞の選考が行われ、受賞者が決定されました。

学会賞は第四紀学の発展に貢献した顕著な業績を有し、また日本第四紀学会の活動に著しい貢献があった正会員に授与される、学会における最高の賞です。また学術賞は第四紀学に貢献した優れた学術業績をあげた正会員に授与されます。会員から候補者の推薦・立候補を受け付け、1 月 31 日をもって締め切られました。その後、学会賞受賞者選考委員会（中村俊夫委員長、海津正倫、河村善也、杉山雄一、高原光各委員）によって学会賞候補者 2 名、学術賞候補者 3 名が推薦され、6 月 7 日に行われた評議員会において、下記の通り受賞者が決定されました。

- 日本第四紀学会学会賞：小野有五会員  
受賞件名：「東アジアにおける氷期・間氷期の気候変化と地形発達の研究と環境保全に関する実践的研究」
- 日本第四紀学会学会賞：斎藤文紀会員  
受賞件名：「日本列島及びアジアの大陸棚から沿岸平野の地質と後期第四紀の古環境に関する一連の研究」
- 日本第四紀学会学術賞：阿部彩子会員  
受賞件名：「氷期・間氷期サイクルと古気候モデリングに関する一連の研究」
- 日本第四紀学会学術賞：池原 研会員  
受賞件名：「日本周辺海域における最終氷期から現在に至る海洋環境変動と堆積作用に関する一連の研究」
- 日本第四紀学会学術賞：高原 光会員  
受賞件名：「花粉分析に基づく後期更新世以降の東アジア植生史研究への貢献」

論文賞及び奨励賞は、会誌「第四紀研究」に掲載された第四紀学の発展や進歩に貢献する優れた論文を公表した会員を含む著者に授与されるもので、とくに奨励賞は若手研究者（会員）の育成と研究奨励に寄与することを目的としています。会員から候補者（候補論文）の推薦・立候補を受け付け、1 月 31 日をもって締め切られました。その後、論文賞受賞者選考委員会（三田村宗樹委員長、荻谷愛彦、近藤 恵、里口保文、横山祐典各委員）によって論文賞候補 1 編、奨励賞候補者 1 名が推薦され、6 月 7 日に行われた評議員会において、下記の通り受賞者が決定されました。

- 日本第四紀学会論文賞：田島靖久会員・林 信太郎氏・安田 敦氏・伊藤英之氏  
受賞論文：[論説] 田島靖久、林 信太郎、安田 敦、伊藤英之、テフラ層序による霧島火山、新燃岳の噴火活動史。第四紀研究、第 52 巻、第 4 号、151-171p。
- 日本第四紀学会奨励賞：亀井 翼会員  
受賞対象論文：[論説] 亀井 翼、モグラによる遺物の埋没と埋没後擾乱—茨城県稲敷郡美浦村陸平貝塚を対象として—。第四紀研究、第 52 巻、第 1 号、1-12p。

各受賞者の表彰式は、9 月 7 日の日本第四紀学会大会総会後に行われます。受賞理由等の詳細は、総会及び表彰式において報告されると共に次号の第四紀通信にてお伝えします。また学会賞・学術賞受賞者による記念講演会を計画中です。

## ◆ 2014 年日本第四紀学会功労賞受賞者決定

功労賞は、第四紀学や日本第四紀学会の活動に多大な貢献のあった会員や非会員個人あるいは団体に對して授与されます。功労賞は原則 2 年に 1 度授与され、幹事会が候補者を推薦することになっています。幹事会では、会員の候補者として、概ね 75 才以上で、評議員や各種委員の経験年数などをポイントとして計測し、さらにその上位者から学術的な貢献を加味して検討し、下記 8 名の候補者を選出しました。なお、顕彰の重複を避けるため、既に名誉会員となっている方や学会賞受賞者は候補者から外しました。非会員では、大磯丘陵の第四紀層の露頭整備と保存に長年尽力されてこられた安池直治氏と、10 年以上にわたり「第四紀通信」の編集書記を担当され、編集作業に尽力されている岩本容子氏を推薦しました。6 月 7 日の評議員会において、これらの方々の方々の功労賞受賞が決定しました。

- 日本第四紀学会功労賞  
赤木三郎会員、五十嵐八枝子会員、酒井潤一会員、高野武男会員、広岡公夫会員、藤井昭二会員、  
籾倉克幹会員、守屋以智雄会員  
安池直治氏、岩本容子氏

受賞者の表彰式は、9 月 7 日の日本第四紀学会総会後に行われます。

## ◆ 2013 年 学会賞・学術賞受賞者講演会報告

羽佐田紘大 (名古屋大学大学院 環境学研究所 博士後期課程 2 年)

2014 年 6 月 7 日 (土)、名古屋大学環境総合館にて、日本第四紀学会 2013 年学会賞・学術賞受賞者講演会が開催された。当日は約 120 名が来場され、会場は熱気に包まれた。講演者は、学術賞を受賞された立命館大学古気候学研究センター教授の中川 毅先生、同じく学術賞を受賞された早稲田大学教育学部教授の久保純子先生、学会賞を受賞された名古屋大学名誉教授、奈良大学文学部教授の海津正倫先生であった。

中川先生は「年縞研究の 20 年：より正確な時計を求めて」というタイトルで、ご自身がこれまで行ってきた研究の中心である水月湖の年縞堆積物について講演された。水月湖の研究の最初の道筋を示した安田喜憲先生や北川浩之先生との出会いから、水月湖の年縞が「世界標準のものさし」として IntCal に採用されるまでの過程を多くの写真などを用いながらわかりやすく紹介していただいた。2006 年に完全に連続したコアを採取し、国際的な研究者グループを結成・指揮することで、過去 5 万年間の放射性炭素年代校正データを出すことに成功された。講演の結びの「水月湖は地質年代のグリニッジ天文台になった」という言葉から、水月湖の年縞研究が幅広い分野の発展に寄与していることを容易に想像でき、大変印象的であった。

久保先生は「河川と平野の地形からみえること」というタイトルで、詳細な地形分類図の作成やフィールドワークを基にして行ってきた河川地形の研究について講演された。大矢雅彦先生、貝塚爽平先生、町田 洋先生の教えを出発点として、関東地方や東南アジア地域を中心とした古環境変遷の研究に至るまでの過程について図などを交えながら紹介していただいた。河川流域の微地形と遺跡の立地とを結びつけることで、地形学のみならず考古学や歴史学にも有意義な結果を提供されてきた。自治体史の執筆や防災への取り組みなども行ってきており、研究成果を積極的に社会に還元しようとする姿勢が深く心に残った。

海津先生は「沖積低地の過去を知る」というタイトルで、ご自身の大きな業績である日本およびアジア各国における沖積低地・沖積層研究について講演された。大矢雅彦先生との出会いに始まり、陸水学の研究から沖積低地研究への転換、珪藻分析やメッシュマップを用いた新たな研究への取り組み、海外をフィールドとした研究活動に至るまでを明快に紹介していただいた。日本における 18 もの沖積低地の発達過程を面的に復元し、その後、世界最大級のガンジスデルタにも挑戦するなどの活発な研究活動によって沖積低地・沖積層研究の礎を築かれてきた。院生時代のたゆまぬ努力の跡からは学ぶことが多く、新たなアイデアを取り入れながら日本の沖積低地研究を牽引されてきた姿に改めて感銘を受けた。

講演会というかたちではあったが、研究の第一線で活躍されている先生方のお話を聴くことができ、大変勉強になり、刺激を受けた。末筆ながら、講演者の学会賞・学術賞受賞のお祝いを申し上げますとともに、厚く御礼を申し上げます。

日本第四紀学会 2013年  
学会賞・学術賞 受賞者講演会

日時 2014年 6月7日(土) 入場無料  
事前登録不要

13:30 ~ 受付開始  
14:00 ~ 14:05 開会挨拶  
14:05 ~ 14:50 学術賞 中川 毅氏  
「年縞研究の20年：より正確な時計を求めて」  
受賞者名：沖積層形成における古気候学、年代学的調査への貢献

14:50 ~ 15:35 学術賞 久保純子氏  
「河川と平野の地形からみえること」  
受賞者名：河川地形環境の発達に関する研究とその多目的な応用

15:45 ~ 16:30 学会賞 海津正倫氏  
「沖積低地の過去を知る」  
受賞者名：沖積低地と自然環境変化に関する一連の研究

16:30 ~ 16:55 質疑応答  
16:55 ~ 17:00 閉会の挨拶

会場 名古屋大学大学院環境学研究所  
環境総合館、レクチャーホール  
地下鉄名鉄線「名古屋大学駅」徒歩10分  
<http://www.env.nagoya-u.ac.jp/contact/map.html>

主催 日本第四紀学会、後援 名古屋大学大学院環境学研究所  
お問い合わせ先：小森次郎(名古屋大学) | komori@thu.ac.jp

## ◆ 国際第四紀学連合第 19 回大会組織委員会活動報告

前回の評議員会以降、3月9日(第16回)、4月13日(第17回)、5月25日(第18回)の3回の幹事会が開催された。この間の主な進捗は以下の通りである。

参加登録・発表要旨投稿などの委託業務については、JTB コミュニケーションズ (COM) と契約することとし、巡検に関しては、JTB グローバルマーケティング & トラベル (JTB-GMT) にお願いすることになった。今年7月の投稿開始に向けて、JTB-COM と共同でシステムの構築を行って

る。3月末締めで行ったセッションの公募の結果、131件の申し込みがあった。現在、INQUA 科学委員会の Allan Chivas 委員長の下で、各コミッションからの意見が集約され、とりまとめが行われており、6月中には確定の予定である。巡検については、プレが3件、ポストが15件、中日が14件実施の予定で、申し込み開始に向けて、募集案内文等を準備中である。

関連学協会や機関への共催の依頼を継続して行っている。この間に、地球惑星科学連合、国立

環境研究所、国立極地研究所、防災科学技術研究所などから共催承諾の連絡が届いている。内定していた日本学術会議の共同主催が2014年6月2日付けで正式に閣議決定された。募金については、詳細を名古屋大会のホームページに掲載し、必要な書類がダウンロードできるようにした。大会のロゴマークについては、名古屋城を図案にした最終案を確定した。

名古屋国際会議場の現地での確認と現在の準備状況に対する意見を頂くために、名古屋大会の科

学委員会委員長であり、前INQUA会長のAllan Chivas教授（オーストラリア、ウーロンゴン大学）を5月24日から26日まで3日間招聘した。24日に名古屋国際会議場において、名古屋国際会議場、名古屋観光コンベンションビューロー、JTB-COMのスタッフらと準備状況の説明を行い、25日午後には東京で組織委員会幹事との会議を開催し、進捗状況の報告を行うとともに、多くの助言を頂いた。また26日に、東京大学大気海洋研究所において講演会を実施した。

## ◆ INQUA と日本 (3) : 地質の始まり

産業技術総合研究所 斎藤文紀

前回は第四紀という用語がいつから使われ始めたかを記したので、今回はその読み方を述べる予定であったが、文献を読む中で、大きな間違いを前回記述していたことに気がついた。「地質学は江戸末期の箕作阮甫に始まる」としたが、その少し前に、地質学という用語は存在していた。

箕作阮甫が始まりという説は、早坂（1939）、望月（1948）、岡田・鈴木（2009）などで述べられている。この根拠となったのは、早坂（1939）に詳しいので、その部分を下に引用する。

「東京科学博物館の学芸官後閑文之助理学士の考証に依ると、阮甫の諸著述中、内容の点から見て「地殻図説」が最初のものであるらしく、その著作に最初「地学」と記したところを後で朱書で「質」の一字を入れているようで、これが「地理学」又は「地学」に対する「地質学」の起源であろうとのことであります。（後閑君は本邦地質学史の研究に専念して居る殆ど唯一の青年学徒で、既に数篇の発表があり、この講演には非常に利用させてもらいました）（299頁）」

後閑（1934）では、以下のように詳細に記されている。

「幕末の譯書中で重要なのは箕作阮甫譯述の「地殻圖説」「日本記聞」「地質辨證」「日阿羅義名目」の稿本である。譯述年月は「地質辨證」に文久二年

（1861）とあるのみで他の前後は分らない。併し私は内容を讀んで見て地殻圖説が最初に書かれたものではないかと思ふ。茲に一言したきは現在私等が用ふる地質學という語は、箕作先生が初めて作った譯語と思はれることである。私は地質學といふ言葉を誰が作ったか興味を持って居た。この地殻圖説の二頁や三頁に地學と書き、後に朱書で質の字を加へて居る。思ふに之れは現在の地理學を常時、輿地學、地理學又は地學と呼んだので、ゼオロジーとゼオクラフィーとを分つために、地學では分らなくなるので「質」の字を用ひたのではあるまいか。これが同書が地質辨證より早く書かれたと思はれる點である。何せよ箕作先生が譯語のために非常に苦心されたことはこの四冊の書を通して察するに餘りある。（191-192頁）」

一方、漢字の母国である中国ではいつから「地質」が使われ始めたのだろうか。中国において初めて「地質」という語が使われたのは、慕維廉による「地理全志」とされている（鄒, 2000; 郝ほか, 2010）。上海の墨海書館から1853年に世界各地の地理を記述した地理全志の上編が、翌1854年に地理学概論の下編が出版される。この下編は、地質論、地勢論、水論、気論、光論、草木総論、生物総論、人類総論、天文論、地史論の10巻から構成されており、ここに「地質」が初めて記述される（図1）。

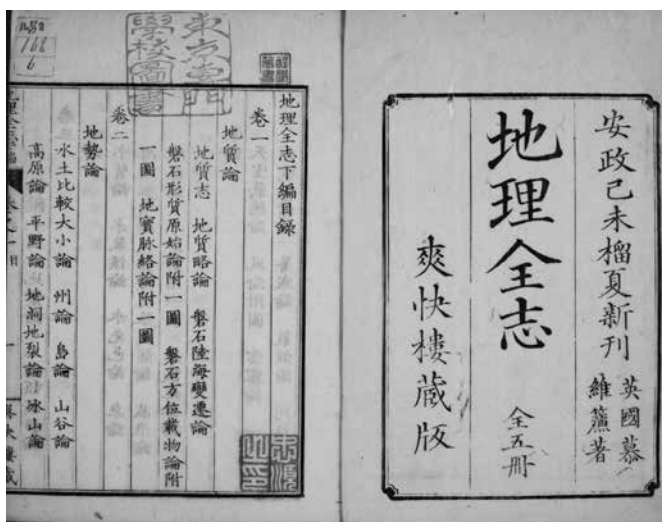


図1. 地理全志下編の見返しと巻1の地質論の目次。上述の黄色の表紙版。早稲田大学図書館所蔵、ル02 00168、地理全志、下篇第一冊 / 慕維廉 輯訳より（使用許可 14-122）。

日本での普及に関しては吉田 (1986) に詳しく、それによると以下の通りである。日本において幕末期に「地理全志」の翻刻を最初に実行したのは岩瀬忠震で、彼は早くより外国事情の調査・研究に着手しており、当時としては世界の大勢に関し、非常に優れた識見を持っていた。中国語で刊行された「地理全志」は特に待望の書であったわけで、少しでも広い範囲に普及させる為、翻刻版の刊行を熱心に推進した (同文献 32 頁)。翻刻版は和十冊 (上篇五冊、下篇五冊) より成り、英国慕維廉著、爽快楼蔵梓とある。翻刻版は大きく二種に分かれ、小豆色の表紙の版の刊行年は、上篇扉に安政戊午 (五年; 1858 年)、下篇扉に安政己未 (六年; 1859 年) の年次が記されている。これに対し黄色の表紙の版の刊行年は上巻・下巻ともに安政己未 (1859 年) となっている。翻刻版は原本の英文序文及び冒頭の「創造天地万物記」を全文削除し、最初に塩谷岩陰の序文を載せている。また本文の所々において、キリスト教に関係のある文字を意図的に抹消しており、原本に含まれているキリスト教関係の文字を少しでも除去することに努めている (同 34-35 頁)。

中国に入った英国の宣教師については、吉田 (1986) によると、19 世紀に入華したプロテスタント宣教師は、伝道事業の一環として中国語著作による西洋事情の紹介を積極的に展開した。これは中華思想のもとにおいて中国人が南蛮と規定していた欧米諸国の実情を具体的に認識させ、その偏見を是正すると同時に、海外事情の紹介を通してキリスト教に対する親近感を育成し、キリスト教伝道の上にも有利な資料となることを期したものである (同文献 3 頁)。中国においてはこれらの書物が伝える内容を本格的に受容し、さらに消化するまでに半世紀以上もの時間を要したが、これらの書籍は日本に舶載され、日本知識人を「啓蒙」し、日本の「開国」を促進し (劉, 2014; 225 頁)、明治初期の啓蒙や教育に大きく貢献した。明治初頭では各地の藩校などにおいて教科書として使用され、地理全志は 5 つ以上の学校で採用されている (劉, 2014; 228 頁)。また日本人による最初の広域地質図を作成し、地質観察記録を作成した高島北海も、この地理全志から学んだことがわかっている (土井, 1978; 金折, 2012; 島津, 2012)。

地理全志の下巻には、地質や層序の基本的な考え方が述べられており (図 2)、その基になった書籍としては、Thomas Milner, Hugo Reid, Mary Somerville の著作が推定されている (吉田, 1986; 岩田, 2003-2004)。

Geology を「地質」と訳した慕維廉は、本名が William Muirhead (ウイリアム・ミュアーヘッド)、1822 年 3 月 7 日イギリス、エジンバラ付近のリースで生まれ、チェシャント・カレッジを卒業後、ロンドン会の宣教師として 1847 年に上海に到着し、1900 年の死に至るまで上海を中心として中国伝道に献身した (吉田, 1986)。地理全志は、上海ロンドン伝道会の諸資料を総合して書かれたものである。地理は、文・質・政からなるとした「新釋地理備考全書: 瑪吉士 (Martinho José Marques) 編 1847」と同じく、慕維廉は、「地之理」は「文」「質」「政」の分かれ、「文」は天体としての地球、「質」は地質と地形水文気象生物に、「政」が地誌を扱うと説明しており (島津, 2012)、「地質」という語を造った。上記した推定されている基になった書物の他にも、ライエルの地質学原理が上海の蔵書にあったことがわかっている (八耳, 2005)。

地理全志が「地質」と記した最初の書物であることは、歌代ほか (1978) では、「西洋の geology を「地質」と訳したのは、中国の「地理全志」だ」という (後閑文之助氏による) と記され、土井 (1978) においては、「とくに本書の地質論は、これまで確定した言葉がなかったわが国に地質という文字と概念を与え、その生命は現在に至るまでに及んでいる」として詳しく紹介している。箕作阮甫についても、最初地学と訳していたが朱書して地質としているのは、地理全志の影響と推定している。箕作阮甫と地理全志の序文を書いた塩谷岩陰 (世弘、甲蔵) は、「海国図志」の出版で、1854 ~ 1856 年に一緒に仕事をしていることから、箕作阮甫に地理全志の情報が入ったのであろう。

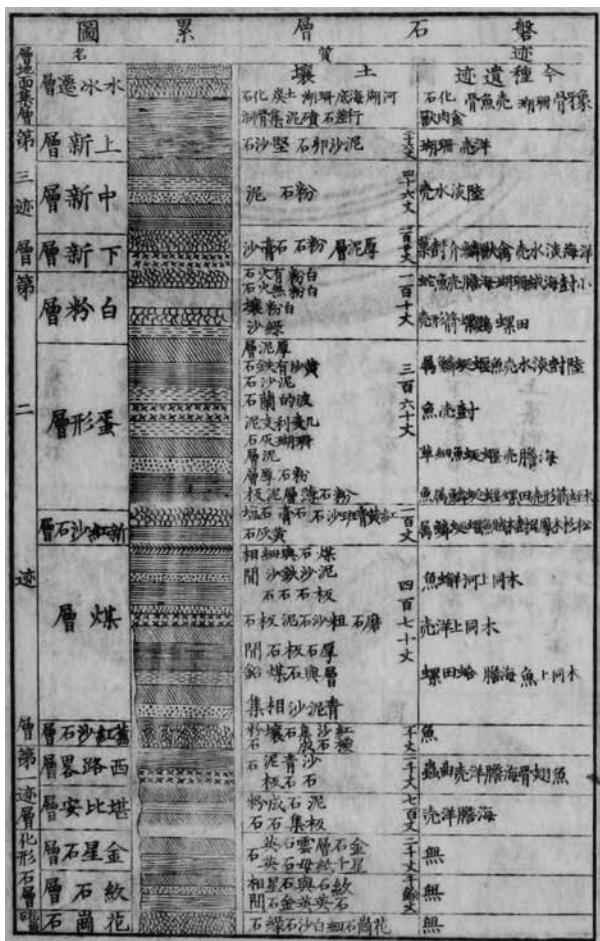


図 2. 総合地質柱状図。Primary, Secondary, Tertiary に対して、第一迹層、第二迹層、第三迹層が用いられている。Miocene に対応する中新層も見られる。早稲田大学図書館所蔵、同上の地理全志より (使用許可 14-122)。

## ▶文献

- 土井正民 (1978) わが国の 19 世紀における近代地学思想の伝播とその萌芽. 広島大学地学研究報告, 21, 1-170.
- 後閑文之助 (1934) 江戸時代の鑛業書と地質學書. 東京科学博物館編「江戸時代の科学」190-204.
- 郝梓国・江少卿・孟慶偉・費紅彩・章雨旭・周健 (2010) 建国 60 年我国地学期刊的發展与展望. 中国科技期刊研究, 21, 129-137.
- 早坂一郎 (1939) 明治以前の本邦地質學・鑛物學. 台湾博物学会会報, 29, 283-302.
- 岩田高明 (2003-2004) 漢訳洋書の西洋教育情報—「瀛環志略」「地球説略」「地理全志」の分析を中心にして—. 安田女子大学大学院開設十周年記念論文集, 13-24.
- 金折裕司 (2012) 高島北海と日本最初の広域地質図. 応用地質, 53, 89-97.
- 劉建輝 (2014) もう一つの「近代」ロード. — 19 世紀の日欧交流における広東, 上海の役割. 「日本研究」再考——北歐の実践から [北歐シンポジウム 2012], 国際日本文化研究センター海外シンポジウム報告書, no. 19, 215-228.
- 望月勝海 (1948) 日本地學史. 平凡社全書.
- 岡田博有・鈴木茂之 (2009) 日本最初の用語「地質学」の成立: 箕作阮甫 (1799-1863) の貢献. 岡山大学地球科学研究報告, 16, 1-7.
- 島津俊之 (2012) 地理学者としての高島北海. 空間・社会・地理思想, 15, 51-75.
- 歌代 勤・清水大吉郎・高橋正夫 (1978) 地学の語源をさぐる. 東京書籍, 195p.
- 八耳俊文 (2005) 入華プロテスタント宣教師と日本の書物・西洋の書物. 或問, 27 (9), 27-41.
- 吉田 寅 (1986) 入華プロテスタント宣教師の海外事情紹介. 歴史人類, 14, 1-42.
- 鄒振環 (2000) 晚清西方地理学在中国. 以 1815 至 1911 年西方地理学訳著的伝播与影響为中心. 上海古籍出版社.

## ◆ INQUA 回想録 INQUA Commission on Stratigraphy のこと

熊井久雄

## はじめに

「インカ」という用語を故桑野幸雄さんから聞いたのは私が 1962 年に大学を卒業して農林省熊本農地局に職を得て、有明海の干拓調査を故柴崎達雄リーダーのもとに行っている時であった。有明海の海底資料の微化石分析を担当していた桑野さんを訪ねて東京新大久保にあった資源科学研究所(通称資源研)に行った折であったと思う。ここで話題に上がっていたのが、先の「インカ」であった。その時には「なぜ有孔虫の研究をしている桑野さんが南米のインカ文明のことを問題にしているのだろうか」と不思議な気分になった。その「インカ」が「International Union for Quaternary Research」という国際機関であることを知った。

この INQUA と初めて向き合ったのは 1986 年 10 月に大阪と京都で実施された第 1 回アジア・太平洋地域第四紀層序国際コロキウムに参加したことだった。この動きの基になったのは市原さんを中心とした更新統の研究グループであった (Ichihara and Kuwano ed. 1982)。アジア・太平洋地域第四紀層序分科会 (Sub Commission on Asia and Pacific area) は 1982 年の INQUA モスクワ大会の折に INQUA Commission on Stratigraphy の Sub-commission の一つとして組織されたものであった。実はこれに先立って当時の INQUA Commission on Stratigraphy 委員長の Alekseev, M. S. がインドネシアまで来て、当時、Sangiran の調査中であつた市原さんに日本の参加を強く要請していた。その後、以前の委員長であつた Richmond, G. M. (USA) が来日し、当時の INQUA Commission on Stratigraphy 委員

原 実さんと相談していた。余談になるが、この時、彼は楡井 久さんら千葉県地質環境研究室のメンバーの案内で養老川セクションを見学し、このセクションが下部・中部更新統の GSSP (Global Boundary Stratotype Section and Point) 候補地として有望なものであることを表明した。筆者もこの巡検に参加し、「International Stratigraphic Guide」(Hedberg, 1976) の重要性を教授された。この本の新しい改訂版は Salvadol ed. (1994) であり、その日本語版は日本地質学会編 (2001) である。

## INQUA Commission on Stratigraphy

この Commission の最近の動向について、筆者がそのメンバーの一員として参加して得た動向を概説してみたい。筆者が日本代表として参加した INQUA 大会は 1992 年の中国北京大会からである。この大会では先回カナダのオタワで開催された INQUA 大会で発足したワーキンググループが Commission on Stratigraphy の Subcommission として発足し、Subcommission on Major Subdivision of the Pleistocene に昇格して 2 期に渡る活動が認められた。委員長は Richmond, G. M. で熊井が副委員長に選出された。ここから、Pleistocene の再区分問題がスタートした (熊井, 1992)。

また、同時に Plio-Pleistocene 境界についての議論も再開された。それまで、古人類の出現を一つの根拠として設定されていたオールドバイの GSSP が揺らいできていた。そこで、ここで第四紀の具体的な境界モードがどうなっているのかを概観してみよう。1990 年代から INQUA の Commission on Stratigraphy で第四紀の下限の問題が議論さ

れてきた。著者が関与したこの会議では、1991年に北京で開催された第13回 INQUA 大会や、1992年に京都で開催された IGC の折に開催された INQUA の Commission on Stratigraphy の会議では、すでにその当時案として提案されていた第四紀の基底としてのブリカセクションでは新しすぎるとの意見が多数を占めていた(熊井, 1992)。その大きな理由としては、この層準が提案された1970年代から、研究が飛躍的に進展し、第四紀の「定義」が成り立たなくなってきた。例えば、ブリカセクションの層準の大きな根拠としていた「人類の出現」については、オールドバイ溪谷以外にも古いものが次々と発見されていたので、オールドバイ溪谷の人類化石出現層準の最下底に接する玄武岩の示す古地磁気層準「オールドバイ・サブクロン」は意味を成さなくなっていた。ブリカセクションの境界モードはこのオールドバイサブクロンの上位で、最初に出現するマーカーベッド腐泥層 e 層の上面に設定されている。

このような状況の下に、1995年にベルリンで開催された INQUA 大会では「The Pliocene/Pleistocene boundary」のシンポジウムも開かれて、ブリカセクションの支持者や新たにこの境界を古地磁気層序の Matuyama/Gauss 境界付近に下げようと言うグループの新モード地提案などがなされた(熊井, 1996)。並行して開催された Commission on Stratigraphy の会合では、いつもと違って、連日、熱の入った議論になり、「定義」についての一定の理解を得るまでに至った。定義はなぜか複数上げられ、この頃から動物化石優先の原則が崩れかかってきたことを示している。多くの賛同を得た定義の第1は「ミランコビッチサイクルの振幅が大きくなった時期」と言うものであったが、そのほかに、「北半球に氷床が発達し始める時」や「レスの堆積開始」などが挙げられた。これらの「定義」の基には、主にフランスの研究者たちからの提案であった「*Homo* 属の出現」と言うことが、暗黙の了解事項として存在していた。

その後、この提案が Subcommission である INQUA の Commission on Stratigraphy から親委員会である ICS (International Commission on Stratigraphy, IUGS) に上げられて、ここで議論された。ICS ではこの問題は Neogene と Quaternary の両 Subcommission (この時点では INQUA Commission on Stratigraphy は ICS の Subcommission) でまず議論せよ、と言うことになり、最終的に両方のメンバーによる投票にかけられた。投票の中身は、INQUA から提案された Quaternary の下限、つまり Pleistocene の下限を M/G 境界まで下げる、と言う案に対して、Neogene の Subcommission からは従来のブリカセクションを擁護するものであった。投票では INQUA 側が圧倒的に不利であった。INQUA 加盟国と IUGS 加盟国の数の違いがそのまま委員数に反映されてしまうので、投票するまでもなく Neogene 案が可決されてしまう仕儀になるであろうことが明白であった。ここで、INQUA メンバーは申し合わせて、抗議の投票ボイコットに出た。

しかし、これは認められず、いままで盛んにその不具合が議論されていたブリカセクションが正式な国際モード地に決定してしまったわけである(熊井, 2000)。これがひとつの流れである。

一方、先に紹介したように、用語としての「第四紀」、第一、第二、第三が無くなってしまった後の四番目の時代と言う形容矛盾をどうするかと言うジレンマがあった。すでに新生代の中の「第三紀」が Paleogene (古) と Neogene (新) に分けられているときに、これとは違った概念が入り込むのをよしとしない研究者が多くなっていった。新生代の中を Paleogene (古) と Neogene (新) に分けて、第四紀をやめてしまえば、用語的にはすっきりすると言うのが第四紀関係者以外の方の意見であった。これに対して、INQUA の Commission on Stratigraphy では手をこまねいていた訳ではなく、2003年のネバダ州で開催された INQUA 大会では、これへの対策が練られていた(熊井, 2004)。「紀」としての第四紀を残せ、と言うのが本音ではあるが、情勢はともこのことを諾々と許すようなものではないと言う認識で一致した。従ってここでは次善の策が練られていた。ただし、このときは、ちょうど INQUA の組織的リストラと重なり、従来の Commission がいくつか寄せ集められて、新しい組織となったことも影響して、集中的な議論ができない状況になっていた。従来の Commission on Stratigraphy は火山灰や放射年代などの Commission と一緒になって、Commission on Stratigraphy and Chronology となって、動きがやや鈍くなってしまった。これによって、従来 INQUA Commission on Stratigraphy が ICS の Subcommission であったものが別組織となり、ヨーロッパの国の代表を中心にして ICS の Subcommission が構成された。大会後はこのメンバーを中心に ICS や INQUA 執行部に対してかなり具体的な提案を含めて意見を伝えてきた(例えば、Pillans and Naish, 2004)。

### Subcommission for Stratigraphy of Asia and Pacific Region

この会は1987年の INQUA カナダ大会で INQUA Commission on Stratigraphy の Subcommission の一つとして承認された。最初の組織は日本、ソ連(現在のロシア)、タイ、ニュージーランドからの代表で構成され、委員長の市原実さんから次期の体制が提案され、委員長に Arkhipov, S. A. (ソ連)、副委員長に Wu, Zirong (中国) と熊井が推薦された。先に述べた大阪・京都でのコロキウムをこの会の第1回国際シンポジウムとして、2回目からソ連、中国、日本の順で INQUA の Inter Congress の時期に国際シンポジウムを開催することにした。

この取り決めにしたがって、第2回のシンポジウムが1988年10月にソ連のナホトカで開催された。日本からの参加者は市原実さん御夫妻、赤羽貞幸さん、佃栄吉さん、小野昭さんと熊井であった。この会にはソ連全国から50名を超す参加者があり、かなり盛会であった。モスクワ



から参加した Alekseev, M. S. さんの旧石器遺跡の案内と説明が面白かった。当時のソ連の旧石器研究の先端の研究成果が大いに参考になったと同時に街近くの平地での周氷河現象を詳しく説明してもらえた。

3 回目の国際シンポジウムはソ連で引き続き実施された。1990 年 7 月にヤクーツクで開催された。日本からは亀井節夫さん、中川久夫さん、酒井潤一さん、斉藤真司さんと熊井が参加した。シンポジウムはレナ川を船で上流に巡検しながら夜船内で実施された。この時もソ連の各地から 50 名を超える参加者があり、船が岸辺につくや否や、大勢の参加者が岸に上がり散策を楽しんでいた。この巡検兼シンポジウムの後、筆者と酒井さんとはヤクーツクのマンモス研究所の見学や北極圏のインディギルカ川中流域でのキャンプに招待された。永久凍土からのマンモスの発掘やヘリコプターでの上空からの凍土地形の観察など、興味ある体験ができた。キャンプ地の周辺では狼の足跡などがあり、多少恐ろしい体験もできた。

4 回目のシンポジウムは 1997 年 10 月、東京で開催された。この時の回は日本学術会議第四紀研究連絡委員会と日本第四紀学会主催の International Symposium on Quaternary Environmental Change in The Asia and Western Pacific Region の一環として開催された。Subcommission on Asia and Pacific Region のプログラムは High resolved chronostratigraphy and correlation on the Quaternary of Asia-Pacific Region 一日のシンポジウムで、日本、ロシア、中国、ニュージーランドから 7 本の口頭発表と 4 本のポスターセッションがあった。この時のビジネスミーティングで、Subcommission の委員長に熊井が、副委員長に Han, Jiamao (中国) と Arkhipov, S. A. (ロシア) が選ばれた。

5 回目のシンポジウムは 1999 年 10 月の北京原人発見 70 周年記念シンポジウムの一環として北京で開かれた。日本からは人類学 3 名、古生物学 3 名、考古学 1 名、地質学 1 名 (熊井)、地理学 1 名が参加した (河村・樽野, 2000)。シンポジウム期間 6 日間のうちの一日が Subcommission のシンポジウムに当てられた。シンポジウムのテーマは、Chronology and Stratigraphy で、主要テーマである北京原人に関連した話題が多かった。残念なのは多くの中国人の研究発表が中国語であったので、十分理解することができなかった。

6 回目のシンポジウムは 2001 年 10 月、大阪市立大学で International Symposium on the Assembly and Breakup of Rodinia and Gondwana, and Growth of Asia の一環として実施された。話題がロデニア大陸から第四紀までの長期間なので、参加者も 250 人を超える盛会で、第四紀関係者も中国やインド、ロシアなどから参加された。ヤクーツクやウラジオストック、ウラン・ウデなど以前のアジア太平洋シンポ参加者も多く参加された。この時のアジア太平洋のビジネスミーティングで、委員長に Alexeeva, Nadezhda (ロシア) が、副委員長に Han, Jiamao (中国) と熊井 (日本) が選ばれた。

7 回目のシンポジウムは 2006 年 8 ~ 9 月にロシアのウラン・ウデで開催された。参加者はヨーロッパを含めて 10 カ国ほどから 100 名ほどであり、日本からは熊井の他、三田村宗樹、高井正成、佐藤孝雄、内山美恵子、内山 高の 6 名であった。バイカル湖畔の旧石器遺跡の見学などを含めた一週間のかかりハードな日程であった。ビジネスミーティングでは次期の役員を次のように決めた。委員長は Jin, Chanzhu (中国)、副委員長に三田村宗樹 (日本) と Alexeeva, Nadezhda (ロシア)、次回のシンポジウムは中国で開催する予定とした。

8 回目のシンポジウムは 2007 年 11 月に日本のつくばで「International Symposium on Quaternary Environmental Changes and Humans in Asia and the Western Pacific」の一環として実施された。この国際シンポジウムは日本第四紀学会設立 50 周年記念行事の一環として開催されたもので、海外 15 の国から 35 名と国内からの参加者合わせて約 150 名の参加者があった。7 つのセッションのうち第四紀層序関係のシンポジウムは The Lower-Middle Pleistocene Boundary in the Asia and Pacific Region で日本やロシアから 5 編の口頭発表と 7 編のポスターセッションが提供された (吾妻, 2008)。

この会の期間中 11 月 21 日の昼休みにアジア各国代表者と第四紀学会関係者、各セッションのコンビナーなどが集まり、アジアにおける定期的な第四紀研究に関する国際集会を持つことが合意された。名称を「Asian Conference on Quaternary Research」(略称: AsQUA) とすることにし、第 1 回目のシンポジウムを 2009 年に中国で開催することにした。

第 1 回 AsQUA シンポジウムは 2009 年 10 月に北京で開催された。この会は「北京原人第 1 頭蓋骨発見 80 周年記念国際古人類学学術シンポジウム」の一環として開催された。AsQUA シンポジウムは「Changes in Geological Environment and Human Activities in Asia」と題され、20 の口頭発表と 6 題のポスターセッションが行われた。参加者は圧倒的に中国人が多かったが、日本人の他、ロシアや韓国からの参加者も見受けられた。日本からの参加者の中には大阪市大の森野さんや早稲田大学の村上さんなど若手研究者が興味ある口頭発表を行い好評を得ていた。

シンポジウムのお昼休みにビジネスミーティングが行われ、今後の会の持ち方が討論された。それによれば、次回はロシアで開催することにして、2013 年を予定する。その準備のために、この会の座長としてロシアの Erbajeva, Margarita さんが選出された (斎藤, 2010)。

第 2 回 AsQUA シンポジウムは予定どおり 2013 年 9 月にロシアのバイカル湖畔のウラン・ウデ市郊外の Oymur 村のリゾート施設でバンガローを借り切って開催された。参加者はロシアをはじめ中国、日本、韓国、台湾、モンゴルなどアジア諸国からと英国、米国、ドイツ、オーストリアなど地域外からの参加者も多く、この地域への興味の高さが伺える。参加者は全員で 40 名を超え

たものの、日本からは私と鈴木達彦さんの2人だけだった(熊井, 2013)。口頭発表はINQUA Commission on Stratigraphy and ChronologyのPresident Gibbard, P.L.さんのLower Middle Pleistocene Boundaryをはじめとする層序に関する問題点の紹介から始まり、28の口頭発表と約10件のポスターセッションが発表された。8日間のシンポジウムの合間にはTologoi遺跡の見学などが行われたが、まだ9月だというのに降雪にあたりして、さすがはシベリアだと、皆驚いていた。

この会のビジネスミーティングで従来の取り決めと多少異なった合意がなされた。と言うのは、会の名称をAsQUAからASQUA (Asian Conference on Quaternary Research)に変更し、Presidentを置くことにし、次回を開催を予定して

いる韓国のKim, Ju-Yongさんを選定した。

このこととは別に、この会に参加したINQUA Commission on Stratigraphy and ChronologyのPresident Gibbard, P. L.さんの影響かどうかは分からないが、従来、このCommissionのSubcommissionであったSubcommission of Asia and Pacific Regionの名称がSubcommission Asian Quaternary Stratigraphy (ASQUA)に変更になっている。変更が2003年からになっており、2015年までとなっている (<http://www.inqua-saccom.org/> 参照)、先に示したASQUAは集会の名称であり、恒常的な組織は持たないとしていることから、INQUA Commission on Stratigraphy and ChronologyのSubcommissionの名称と混乱することが心配される。



2013年9月ロシア、ウラン・ウデ市郊外、バイカル湖畔で開催された第2回ASQUA大会参加者の集合写真。前列左から7番目の女性がこの会の主催者Dr. Margarita Erbajevaさん。前列左から3番目と4番目の女性の後ろの白髪の男性がCommission on Stratigraphy and Chronology、PresidentのProf. Philip L. Gibbard。

▶参考文献

- 吾妻 崇(2008)学会設立50周年記念国際シンポジウム「アジア・西太平洋の第四紀:環境変化と人類」.  
第四紀通信, 15 (1), 5.
- Hedberg, D. H. ed. (1976) *International Stratigraphic Guide*. John Wiley & Sons, 200p.
- Ichihara, M. and Kuwano, Y., ed. (1982) *The Third Report on the Pliocene-Pleistocene Boundary in Japan*. Japanese National Working Group of the IGCP Project No. 41 Neogene-Quaternary Boundary, 94p.
- 河村善也・樽野博幸(2000)北京原人第1号頭骨発見70周年記念古人類学国際シンポジウム参加報告.  
第四紀通信, 7 (2), 8-9.
- 熊井久雄(1992)C-1層序委員会. 第四紀研究, 31, 50.
- 熊井久雄(1996)Commission on Stratigraphy層序委員会. 第四紀研究, 35, 47-48.
- 熊井久雄(2000)Commission on Stratigraphy層序委員会. 第四紀研究, 39, 252-253.
- 熊井久雄(2004)Commission on Stratigraphy and Chronology層序・年代学委員会. 第四紀研究, 41, 143.
- 熊井久雄(2004)第四紀年代層序新提案に関する解説. 第四紀通信, 11, 4-5.
- 熊井久雄(2013)第2回ASQUAに参加して. 第四紀通信, 20 (6), 9.
- 日本地質学会訳編(2001)国際層序ガイド. 共立出版, 238p.
- Pillans, B. and Naish, T. (2004) *Defining the Quaternary*. *Quaternary Science Reviews*, 23, 2271-2282.
- 斎藤文紀(2010)第1回アジア第四紀学会議(AsQUA)報告. 第四紀通信, 17 (1), 10-11.
- Salvador, A., ed. (1994) *International Stratigraphic Guide*. The Geological Society of America, 214p.

### ◆亀井節夫先生のご逝去を悼む

日本第四紀学会元会長・名誉会員の京都大学名誉教授亀井節夫先生は、去る5月23日、ご逝去されました。享年88歳でした。

先生に初めてお会いしたのは、大学3年になり地質学鉱物学科へ進んだ時でした。たぶんその年、先生は教室主任をお務めだったのでしょう。岩石学講座の故中山 勇先生と共に、新たに教室所属になった学生一人一人と面談されるという機会でした。お二人とも実に温かな印象で、初対面の学生にとっても親しみやすく、ありがたい限りでした。中でも亀井先生は、見るからに「これぞ紳士」という雰囲気、田舎育ちの私にとっては、「住んでいる世界が違う」と思ったものです。この雰囲気は持って生まれられたもののようで、終生変わることはありませんでした。

亀井先生は大学での研究・教育活動の傍ら、多くの博物館において建設計画などの委員を務められました。その最初が大阪市立自然史博物館で、基本構想審議委員、引き続いて建設委員会の展示テーマ部会委員を務められました。私は建物が完成し展示工事真っ最中という1973年、そこへ就職することになり、大学院時代に先生のご指導で始めた日本産長鼻類に関する研究を続けることになりました。先生が引かれたレールの上を進み、それを補強するという仕事をしてきたつもりですが、十分にはご期待に応えられなかったのではないかと危惧しています。

最晩年には、三重県立博物館（現三重県立総合博物館）のリニューアルに長く取り組まれました。私もメンバーだった「ミエゾウ復元委員会」でも顧問として、最後までいろいろとご助言をいただきましたが、残念だったのは、完成したミエゾウの全身復元骨格をご覧いただくことができなかったことです。

亀井先生、どうぞ、ごゆっくりお休み頂きながら、今後も私たちの研究活動を見守って下さい。

樽野博幸（元 大阪市立自然史博物館）



シワリク丘陵での哺乳類化石調査において。

左：亀井節夫先生

右：故池田次郎先生（京都大学名誉教授）

## ◆第四紀学会講習会「放射性炭素年代測定」実施報告

東京大学総合研究博物館 米田 穰

放射性炭素年代測定は、過去5万年の絶対年代測定法として、最も広く利用される手法のひとつである。2013年には、福井県水月湖の湖沼堆積物データが組み込まれ年代校正のデータセット「IntCal」が報告され、さらに確度の高い年代情報が得られるようになった。さらに、骨コラーゲンの限外ろ過法や、木炭の段階加熱法など新たな前処理方法の応用も広がり、今日でも放射性炭素年代をめぐる測定技術は日進月歩である。

本会では、「2000年佐倉宣言」において校正年代を積極的に用いることを推進するなど、放射性炭素年代に関する研究をリードしてきた。その結果、我が国では10カ所の施設で加速器質量分析器(AMS)が運転され、民間の分析会社による放射性炭素年代の測定サービスも広く行われるようになった。一方で、放射性炭素年代がブラックボックス化している状況になりつつある弊害もある。関心あるイベントについてより正しい年代を得るためには、試料の種類による前処理方法の違いや固有の問題点、海洋リザーバにおける年代のずれとその地域性など、方法の原理と実際の測定を理解することが重要であり、また現状の測定限界を正しく理解することがより挑戦的な研究を実現することにつながる。我々、東京大学総合研究博物館放射性炭素年代測定室では、各種資料の前処理からAMS測定、そしてベイズ推定を用いたデータ解析方法まで系統的に学ぶことができるワークショップを昨年4月に開催し、大変な好評を得た。そこで、今年度は日本第四紀学会講習会として、学外の会員にも広く参加して頂けるようにし、放射性炭素年代を用いたより多くの研究で活用して頂くことを試みた。放射性炭素に関する第四紀学会講習会は、名古屋大学で開催された1999年以来となる。

講習会は、東京大学総合研究博物館において2014年5月21日から23日の日程で実施し、初日と2日目の実習には16名、3日目のベイズ統計に関する講義には23名が参加した。初日は放射性炭素年代とAMS測定についての基礎的な講義から始まり、前処理方法の原理と実際に処理を経験する実習が行われた。2日目には、精製した有



放射性炭素年代の前処理に関する実習の様子

機物から二酸化炭素を発生し、真空ラインをもちいて精製する過程を実習した。午後には浅野キャンパスに位置する加速器分析施設MALT(東京大学総合研究博物館加速器分析室)を見学し、さらに筑波大学UTTACに建設中の6MVの加速器について紹介して頂いた。最終日には、ベイズ統計学を用いた校正年代のモデル構築の原理と方法に関する実習が行われ、実際に年代校正プログラムOxCALを用いた実習を行った。OxCALは独自のコマンドと操作体系のため、直感的に操作することは容易ではないが、操作に熟達した講師から直接ノウハウを学ぶ貴重な機会となった。

参加者の専門分野は、考古学・地理学・保存科学・古海洋学・花粉分析・火山学などの多岐にわたった。すでに、研究で炭素年代を利用した経験がある方が過半数を超えていたが、系統的に学習する機会が少ない新たな前処理方法やデータ解析方法を学習することができた点で、多くの参加者から高い評価を得た。さらに安定同位体や無機試料の前処理方法、海洋リザーバ年代の補正方法などについて、講習を実施する要望が寄せられた。我々は第四紀研究では基礎となるより正確な時間情報を多くの研究で利用して頂くために、今後も定期的に講習会を開催していく計画である。今後も多くの会員に参加して頂けることを期待している。

## ◆2013年度第3回評議員会議事録

日時：2014年6月7日(土) 12:10～13:30  
 場所：名古屋大学環境総合館 3F 講義室2  
 出席：小野会長、吾妻、海津、岡崎、奥村、河村、北村、久保、小荒井、斎藤、高原、竹村、中村、藤原、水野、吉永  
 欠席：阿部、池田、出穂、植木、工藤、小池、佐藤、里口、澤井、白井、須貝、鈴木、辻、陶野、長橋、八戸、松浦、松下、三田村、宮内、本川、山崎、横山、渡邊

小森次郎行事・企画幹事の司会で、小野会長のあいさつの後、竹村恵二評議員を議長に選出した。定足数確認(出席者16名、委任状19通)後、配布資料に基づき、下記の審議が行われた。

## 審議事項

## 学会賞、学術賞の決定

学会賞、学術賞を下記のように決定した。なお、

受賞タイトルおよび推薦文については幹事会で精査し、最終案を作成することとした。

学会賞：

小野有五会員「東アジアにおける氷期・間氷期における気候変化と地形発達の研究と環境保全に関する実践的研究」

齋藤文紀会員「日本列島及びアジアの大陸棚から沿岸平野の地質と後期第四紀の古環境に関する一連の研究」

学術賞：

阿部彩子会員「氷期・間氷期サイクルと古気候モデリングに関する一連の研究」

池原 研会員「日本周辺海域における最終氷期から現在に至る海洋環境変動と堆積作用に関する一連の研究」

高原 光会員「花粉分析に基づく後期更新世以降の東アジア植生史研究への貢献」

### 論文賞・奨励賞の決定

論文賞・奨励賞を下記のように決定した。なお、推薦文については幹事会で精査し、最終案を作成することとした。

論文賞：

田島靖久・林 信太郎・安田 敦・伊藤英之、テフラ層序による霧島火山、新燃岳の噴火活動史。第四紀研究、第 52 巻、第 4 号、151-171p。

奨励賞：

亀井 翼、モグラによる遺物の埋没と埋没後擾乱—茨城県稲敷郡三浦村陸平貝塚を対象として—第四紀研究、第 52 巻、第 1 号、1-12p。

### 名誉会員の候補者決定

名誉会員の候補者を下記のように決定した。なお、推薦文については幹事会で精査し、最終案を作成することとした。

遠藤邦彦会員、岡田篤正会員、上杉 陽会員、陶野郁雄会員。

### 功労賞の決定

功労賞を下記のように決定した。

赤木三郎会員、五十嵐八枝子会員、酒井潤一会員、高野武男会員、広岡公夫会員、藤井昭二会員、籾倉克幹会員、守屋以智雄会員、安池直治氏、岩本容子氏。

## ◆日本第四紀学会 2013 年度第 5 回幹事会議事録

日時：2014 年 6 月 7 日（土）10:00～12:10

場所：名古屋大学環境総合館 3F 講義室 2

出席：小野会長、吾妻、岡崎、奥村、北村、小森、齋藤文紀、齋藤めぐみ、藤原、水野

欠席：出穂、卜部、佐藤、宮内、米田

### 報告事項

#### 庶務（北村）

1. NPO 法人地学オリンピック日本委員会より「第 10 回国際地学オリンピック 2016 組織委員会委員」就任依頼があり（20140224）、小野会長の就任を承諾した（20140307）。
2. 日本ジオパーク委員会事務局から委員選出の依頼があり（20140402）、小野会長と目代邦康会員を推薦した。
3. 日本粘土学会より「第 58 回粘土科学討論会」共催依頼があり（20140404）、これを承諾した（20140309）。
4. 富士学会より「富士学会 2014 年春季学術大会」後援依頼があり（20140411）、これを承諾した（20140414）。
5. NPO 法人地学オリンピック日本委員会より「NPO 法人地学オリンピック日本委員会の活動に対する支援のお願い」があり（20140508）、これを承諾した（20140515）。協賛金は 1 口 5 万円。
6. 一般社団法人日本地質学会より「日本地質学会第 121 年学術大会（鹿児島）巡検」の協賛依頼があり（20140529）、これを承諾した

（20140602）。

7. 日本学術会議 IGU 分科会より「IGU2014 クラクフ大会（国際地理学会議地域会議）における日本紹介展示および寄付」について協力依頼があり（20140512）、3 万円（3 口）の寄付を承諾した（20140603）。

#### 庶務（佐藤）

1. 共立出版から、過年度に与えた転載許可に関する印刷ミスとその対処法に関して連絡が有り、経緯は以下の通り。
  - 1) 共立出版では、転載許可を得た下記の図版を同出版刊行図書に転載印刷する際に、他の図版と重複印刷した。  
転載元：五十嵐八枝子・成瀬敏郎・矢田真一・壇原 徹（2012）「北部北海道の剣淵盆地における MIS7 以降の植生と気候の変遷史—特に MIS6/5e と MIS2/1 について」第四紀研究、51、175-191 の p. 177 の Fig. 2  
転載先：『地球環境変動の生態学』
  - 2) 本書はすでに書店に向けて発送したため、今後の対応として正誤表を挟み込むとともに、共立出版ウェブサイトサポートページにて正しい図版を掲載することにした。ついては、この措置に対して、再度転載許可申請が必要か、という問い合わせがあった。
  - 3) そのため共立出版から追加資料を得て、誤った印刷状態と正しい印刷状態（正誤表）を確認し、さらにサポートページの処置法も確認した。
  - 4) 以上の経緯について、水野幹事長と相談した

結果、単純な印刷ミスであり、事後処置も適切な  
ので、改めて転載許可申請は不必要と判断し、  
幹事会に報告することとした。

2. 地盤工学会関東支部から森脇 広 (1979) 九十九里海岸平野の地形発達史, 第四紀研究, 18-1, 1-16 の図の転載許可 (転載先: 『関東の地盤 (2013 年度版)』 (仮題), 地盤工学会関東支部) と二次的利用 (付録 DVD に収録) 願いがあり (20140214)、これを許可した (20140224)。
3. 石森孝志氏 (八王子市長) から山崎晴雄 (1978) 立川断層とその第四紀後期の活動, 第四紀研究, 16-4, 233 の図 1 の転載許可願い (転載先: 『新八王子市史 自然編』, 八王子市) があり (20140317)、これを許可した (20140401)。
4. ミネルヴァ書房から町田 洋・鈴木正男・宮崎明子 (1971) 南関東の立川, 武蔵野ロームにおける先土器時代遺物包含層の編年, 第四紀研究, 10-4, の図 3 の転載許可願い (転載先: 『自然地理学』, ミネルヴァ書房) があり (20140522)、これを許可した (20140602)。
5. 2014 年学会賞・学術賞・論文賞・奨励賞受賞候補者の選考を行った。候補者選考の経緯と結果の詳細を次回評議員会にて公表・審議する。
6. 2014 年名誉会員候補者の選考を行った。候補者選考の経緯と結果の詳細を次回評議員会にて公表・審議する。

### 編集 (卜部、藤原)

1. 第四紀研究編集状況
  - 53 巻 3 号 (6 月号) 受賞記念論文、論説 2 編、講座 1 編で構成。
  - 53 巻 4 号 (8 月号) 弘前大会特集号前半 (巻頭言 +3 編、講座、書評 2 編)。
  - 53 巻 5 号 弘前大会特集号後半 2 編、通常投稿論文 2 編程度で構成予定。
2. 受理通知書の変更
 

これまで葉書による受理通知書を送り、編集書記からのコメントを書き添えていた。  
しかしコメントが多い場合は見にくくなっていた。受理通知書用の葉書が無くなったこともあり、今後は「受理通知書」と入稿についての事務連絡をそれぞれ A4 用紙で作成し、封書で送ることに変更することとした。
3. 投稿規定について
 

HP からダウンロードする送り状の書式が古いままであったので、修正する。

### 行事企画 (出穂、米田、小森)

1. 学会賞受賞者講演会を 2 月 2 日 13 時～15 時に日本大学文理学部 3 号館で開催し、岩田修二会員と陶野郁雄会員が講演した。出席者 62 名、中尾由利子会員に協力頂いた。会場係としてアルバイト (3 名、4 時間) を雇用した。
2. 5 月 21～23 日に東京大学総合研究博物館放射性炭素年代測定室の主催の第二回放射性炭素年代測定室ワークショップを共催した。
3. 6 月 7 日 14～17 時に学会賞・学術賞受賞者講演会を開催する予定である。講演者は、中川

毅会員、久保純子会員、海津正倫会員である。  
名古屋大学大学院環境学研究科が後援、堀 和明会員に協力頂いた。

4. 2014 年大会の開催
  - ・プレ巡検: 9 月 5 日。房総半島養老川 (千葉セクション)。案内は風岡 修・岡田 誠会員他。
  - ・シンポジウムと一般研究発表: 9 月 6 日～8 日。3 会場並行で開催。6 日に評議員会、7 日に総会・懇親会を開催。
  - ・ポスト巡検: 9 月 9 日。第四紀年代測定等最新施設見学ツアー。案内は横山祐典・田村 亨会員他。
  - ・一般発表申込・要旨投稿締め切り: 6 月 30 日。今大会から、要旨原稿は A4 一枚として、レイアウトを統一した。会員へはテンプレートのファイルを学会ウェブサイト経由で提供する。
5. 自然史学会連合から講演会「過去に学び、現在を識り、未来を測るー自然史がつなぐ過去と未来ー (仮)」の講演者の候補者依頼があり (20140218)、齋藤めぐみ会員を推薦した (20140310)。

### 事務局

◆会員消息 2014 年 3～4 月分

**審議**

1. 評議員会・総会の議決方法、議長、委任等に関する規約改正の必要性について審議し、内規で対応することとし、吾妻幹事が原案を作成することとした。
2. 2015年の学会開催の場所を審議し、8月末～9月上旬に開催し、早稲田大学と国立科学博物館を候補とし、次回幹事会までに開催の可否を確認することとした。
3. 第四紀Q&Aの回答原稿の依頼は、広報担当が

行うことを確認した。

4. 広報書記の作業用にPCを買い替えることとした。
5. IGU2014 クラック大会への対応を検討し、INQUA 名古屋大会の資料を提供することとした。
6. 逝去会員への対応を審議し、北村幹事が原案を作成することとした。
7. 2014年柏大会で招待講演者から出張依頼書の提出依頼があり、書式を確認した。

**【重要】会員メーリングリストにご登録ください！！**

かねてより会員の皆様をお願い申し上げていることですが、会員メーリングリストへの積極的な登録をお願い致します。また、すでに登録されている方におきましても、メーリングリストでの情報を受信しているかどうか、今一度ご確認願います。

近年では、電子メールが簡便で確実な情報伝達手段として定着してきております。当学会においても、大会開催情報や各種申込みなど、緊急かつ重要な情報を会員メーリングリストを通じて配信しております。先日も、日本第四紀学会 2014年大会（柏）の講演申込みの期日を延期する旨、メーリングリストで配信しました。6月30日に、このような連絡を受信されていない方には、お手数をおかけしますが、メーリングリストへの登録あるいは登録情報を更新していただけますようお願い申し上げます。

メーリングリストへの登録、登録情報の更新は、氏名、所属、メールアドレスを明記の上、電子メールにて日本第四紀学会事務局へご連絡ください。

日本第四紀学会事務局

〒169-0072 東京都新宿区大久保2丁目4番地12号 ラムダックスビル10階

株式会社春恒社 学会事業部内

E-mail: daiyonki(at)shunkosha.com 電話：03-5291-6231 FAX：03-5291-2176

そのほか、各種イベントに関する情報、公募情報なども引き続き配信してまいります。会員に向けて情報を送りたい場合には、広報幹事（齋藤めぐみ:memekato(at)kahaku.go.jp）までご相談ください。

◆「デジタルブック最新第四紀学」第2刷の販売のお知らせ、ならびに第1刷との無償交換について

旧50周年電子出版編集委員会  
委員長 遠藤邦彦  
事務局 吾妻 崇

昨年度の弘前大会以降に行ってきました学会行事会場での「デジタルブック最新第四紀学」第2刷の販売・交換につきまして、9月6日（土）から8日（月）にかけて東京大学柏キャンパスで開催される大会会場での実施をもって終了させていただきます。それ以降につきましては、ジュンク堂書店を通して定価5000円（税別）で一般販売を行っておりますので、そちらを通して購入して頂くこととなります。

既に第1刷をお持ちの方で交換を希望される方は、第1刷のパッケージを大会会場までお持ち下さい。その場で確認後、第2刷をお渡し致します。会場での販売につきましては、会員向け特別価格2000円（1人1部まで）で販売させて頂く予定です。

なお、大会会場に来られない方で交換を希望される方は、お手数ですが、学会事務局メールアドレス（daiyonki(at)shunkosha.com）へご連絡下さい。折り返し、交換手続きの方法をお伝えさせていただきます。よろしくお願い致します。

◆ INQUA2015LOC 主催 ランチタイムセミナー ◆

昨年7月に名古屋で国際第四紀学連合（INQUA）第19回大会が開催されます。これに向けて海外の研究者との交流を促進し、最先端の情報を勉強するため、来日中の海外の研究者をお招きして、第四紀学会の大会中にセミナーを開催することになりました。飲食可の会場を用意致しますので、皆様是非お集りください。

9月6日（土）12時30分～13時20分

Dr Jody Webster (University of Sydney)

： Response of the Great Barrier Reef to sea level and environmental changes over the last 30 ka.

9月8日（月）12時30分～13時20分

Prof. Mordechai Stein (Geological Survey of Israel)

： Abrupt climate changes and their impact of prehistorical cultures in the late Quaternary East Mediterranean – Levant.

★★★ 第四紀通信に情報をお寄せ下さい ★★★

第四紀通信の原稿は随時受け付けております。

広報幹事：齋藤めぐみ（memekato(at)kahaku.go.jp）宛にメールでお送り下さい。

第四紀通信は奇数月月上旬原稿締め切り、偶数月1日刊行予定としていますが、情報の速報性ということから、版下が出来た段階でホームページに掲載するよう努力しています。奇数月15日頃にはホームページにアップするようにしていますのでご利用下さい。

日本第四紀学会広報委員会 国立科学博物館 地学研究部 齋藤めぐみ  
〒305-0005 茨城県つくば市天久保4-1-1 FAX：029-853-8998

広報委員：那須浩郎・糸田千鶴 編集書記：岩本容子

日本第四紀学会ホームページ <http://quaternary.jp/> から第四紀通信バックナンバーのPDFファイルをご覧できます。

日本第四紀学会事務局

〒169-0072 東京都新宿区大久保2丁目4番地12号 新宿ラムダックスビル10階  
株式会社春恒社 学会事業部内

E-mail：daiyonki(at)shunkosha.com 電話：03-5291-6231 FAX：03-5291-2176